

TATE SHI
立 石 貝 塚

宇佐市大字立石所在の縄文時代貝塚

大分県文化財調査報告

第 31 輯

1 9 7 4

大 分 県 教 育 委 員 会

立 石 貝 塚

序 文

瀬戸内海西部に位置する周防灘南部は、九州においても縄文時代貝塚の集中する地域として知られ、戦前より多くの学者のよき研究地域となっております。

これらの県北部に所在する貝塚の中でも立石貝塚は古くからその存在が注目され、すでに数回の学術調査が行われた学史的にも重要な遺跡であります。縄文時代の貝塚は周知遺跡の中でもその数はきわめて少なく、周到な計画によって発掘調査が実施されたものは稀であるといわれております。

この重要な貝塚にも、駅館川大規模園場整備事業が行われるため、大分県教育委員会では、昭和46年度に宇佐市教育委員会と協力して立石貝塚の緊急発掘調査を実施しました。その結果学術的に貴重な成果がもたらされ、また調査期間中説明会・報告会の開催により文化財保護思想の啓蒙に寄与できたことは幸いでした。

この報告書は、これまでの研究を重ねて、今後の縄文時代の文化研究に多大の寄与をなすものと自負しております。

最後に酷暑の中にあつて調査を指導していただいた別府大学賀川光夫教授、遠路にもかかわらず快く参加して下さった長崎大学医学部内藤芳篤教授をはじめ、調査に協力していただいた各位に対し深く謝意を表します。

昭和49年3月30日

大分県教育委員会教育長

山 本 峯 生

例 言

1. 本書は大分県教育委員会が昭和46年度に実施した宇佐市所在の立石貝塚の発掘調査報告書である。
1. 本書の執筆は賀川光夫、内藤芳篤、橘昌信、岩尾松美、坂田邦洋、小池史哲、坂本嘉弘、永松みゆき、小倉正五、清水宗昭が担当した。
1. 遺跡の実測図作成は調査員および調査補助員があたり、その製図と遺物の実測、製図はそれぞれ執筆分担者がおこなった。
1. 図版写真は遺跡関係を橘、小倉。遺物関係を坂本。人骨関係を坂田が担当した。
1. 遺物の整理は土器・石器を別府大学考古学研究室で、人骨を長崎大学医学部解剖第二教室でおこなった。
1. 本書の編集は賀川光夫・橘昌信・清水宗昭がおこなった。

本文目次

	頁
I 調査の経過.....	清水 宗昭..... 1
II 遺跡の環境.....	小 倉 正 五..... 3
III 遺跡の概要.....	坂 本 嘉 弘..... 6
IV 遺 物	
1. 土 器.....	坂 本 嘉 弘..... 9
2. 石 器.....	永 松 みゆき..... 19
3. 貝 輪.....	小 池 史 哲..... 22
4. 縄文時代遺物について.....	橋 昌 信..... 25
5. 自然遺物.....	小 池 史 哲..... 29
6. 中世のカメ棺.....	坂 本 嘉 弘..... 35
V 埋 葬.....	岩 尾 松 美・坂 田 邦 洋..... 36
VI 人 骨.....	内 藤 芳 篤..... 39
VII 総 括.....	賀 川 光 夫..... 46

附 表 目 次

	頁
第 1 表 大分県下縄文文化時代腕輪出土地名表.....	22
第 2 表 立石貝塚出土の石器組成.....	26
第 3 表 任意摘出による貝類一覧表.....	30
第 4 表 貝層を形成する貝類の組成表.....	30
第 5 表 近傍貝塚出土貝類一覧表.....	33
第 6 表 森貝塚貝層組成表.....	33
第 7 表 人 骨 一 覧.....	37
第 8 表 人 骨 資 料.....	39
第 9 表 頭蓋骨の計測値.....	39
第 10 表 鼻根部の計測値.....	41
第 11 表 上腕骨の計測値.....	42
第 12 表 大腿骨の計測値.....	42
第 13 表 胫骨の計測値.....	43
第 14 表 胎児骨の計測値.....	44

挿 図 目 次

頁

第 1 図	立石貝塚周辺の主要遺跡と地理的環境 (国土地理院 5 万分の 1「宇佐」分載) (小倉正五作成)	5
第 2 図	A 地区貝塚の堆積状態 (小倉撮影)	6
第 3 図	貝塚土層断面図 (坂本嘉弘・牧尾義則測・坂本図)	6
第 4 図	立石貝塚地形実測図 (清水宗昭・鹿子島愛里測・鹿子島図)	7
第 5 図	B 地点北側土層断面図 (宮崎正文・牧尾測・坂本図)	8
第 6 図	立石貝塚出土土器拓影・実測図 (Ⅰ類その 1) (坂本測・図)	10
第 7 図	〃 (Ⅰ類その 2) (〃)	11
第 8 図	〃 (Ⅱ・Ⅲ類) (〃)	13
第 9 図	〃 (Ⅳ・Ⅴ類) (〃)	15
第 10 図	〃 (Ⅵ類および底部) (〃)	18
第 11 図	立石貝塚出土磨製石斧実測図 (永松測・図)	20
第 12 図	立石貝塚出土刻片石器実測図 (〃)	21
第 13 図	立石貝塚出土貝輪および貝輪未製品 (小池史哲撮影)	23
第 14 図	立石貝塚出土貝輪実測図 (小池測・図)	23
第 15 図	立石貝塚周辺主要貝塚の分布と周辺地形図 (〃)	24
第 16 図	立石貝塚中世カメ棺出土状況 (小倉撮影)	35
第 17 図	カメ棺実測図 (坂本測・図)	35
第 18 図	A 地区立石人骨埋葬配図 (清水測・図)	36
第 19 図	立石人骨出土状況実測図 (坂田邦洋・宮崎・牧尾・永松測・坂田図)	37
第 20 図	胎児骨の出土状況 (小倉撮影)	38

図 版 目 次

図版 1	遺 跡	
図版 2	土 器	(その 1)
図版 3	土 器	(その 2)
図版 4	土 器	(その 3)
図版 5	石 器	(その 1)
図版 6	石 器	(その 2)
図版 7	自 然 遺 物	
図版 8	立石人骨の出土状況	(その 1)
図版 9	立石人骨の出土状況	(その 2)
図版 10	頭 蓋 骨	(1号人骨)
図版 11	頭 蓋 骨	(3号人骨)
図版 12	頭 蓋 骨	(7号人骨)
図版 13	頭 蓋 骨	(8号人骨)
図版 14	四 肢 骨	(1号人骨)
図版 15	四 肢 骨	(3号人骨)
図版 16	四 肢 骨	(7号人骨)
図版 17	四 肢 骨	(8号人骨)
図版 18	胎 児 骨	

I 調査の経過

〔遺跡の所在地〕

大分県宇佐市大字立石字油尻112

〔調査期日〕

昭和46年8月16日～27日

〔調査団の構成〕

調査員

賀川 光夫（別府大学文学部教授，県文化財専門委員）

内藤 芳篤（長崎大学医学部教授）

橘 昌信（別府大学文学部講師）

坂田 邦洋（長崎大学医学部助手）

岩尾 松美（別府大学文学部嘱託）

小倉 正五（宇佐市教育委員会社会教育課）

清水 宗昭（大分県教育庁文化室）

調査補助員

入学 正敏（宇佐市文化財調査員）

尾造 裕寿（"）

宮崎 正文（別府大学文学部学生）

坂本 嘉弘（"）

牧尾 義則（"）

藤田 和夫（"）

浜本 憲（"）

鹿子島愛里（"）

永松みゆき（"）

宇佐市教育委員会

岸原富士男，長野雅昭

大分県教育委員会

田村卓夫，山村唯男，平野昭彦，藤原貞義
橋本操六，後藤正二，野村 誠，後藤宗俊

このほか東光彦，藤永義高（県中津教育事務所）上田駒男・麻生武（宇佐市文化財調査員）諸氏の参加があった。また調査中，入江英親（県文化財専門委員），吉成安治（豊後高田市立河内中学校長），安楽 勉（宮崎高校教諭），谷崎良晴（兵庫県野田女子高校教諭），上村佳典，志津友子（別府大学文学部学生）諸氏の来訪があった。

このほか調査を快く承諾された安藤秀夫，安

藤内麗，川野しげなが，安藤正澄の諸氏および宿舎を提供された佐藤三治氏，調査の設営に便宜を計っていただいた鳩建設ならびに佐藤商店東秀美氏より何かと援助をいただいた。あわせて感謝の意を表する次第である。

〔調査経過〕

発掘調査は橘昌信を現地主任とし下配の経過で実施した。

8月16日（晴）

現地着，各担当を決め，日程を打合わせる。調査関係地主へのあいさつ。

8月17日（雨のち晴）

午前中は器材の借用と運搬，午後設営とくにA地点は周囲が水田であるためパネルによる足場づくりに時間がかかった。テントはB地点の南側に設置した。一部A地点を掘下げ層位の概要をつかむ。

8月18日（晴）

A地点は全体を4分し，南東部より開始，貝層下より埋葬人骨（1号）を発見す。B地区においては掘下げるも貝層はつかめなかった。測量班は平板測量をはじめる。人骨出土のため，長崎大学医学部へ調査依頼の手続きをとる。

8月19日（曇のち晴）

人骨の露出作業にかかる。見物者が多くなる。午後是人骨の供養を行なう。B地点はさらに北側へ拡張す。坂田助手参加す。

8月20日（曇のち雨）

A地区，1号人骨のとり上げ後北側においてさらに2・3号人骨出土す。B地区，南側土層断面実測を行なう。3号の北側に中世（？）幼児カメラ箱（6号）を発見す。

8月21日（曇のち雨）

A地区西側部において埋葬人骨2体（7・8号）を発見す。本遺跡調査報告会開催のため市教委と県教委の打合わせを行なう。

8月22日（曇ときどき晴）

7号人骨とり上げ，8号人骨の露出作業，

報告会の日時、会場を決める。

8月23日（雨）

A地区中央壁の写真撮影，土層実測後とりはずす。北端部に1×1mの試掘溝をあける。午後雨ひどく作業中止す。A地区発掘終了後の処理について地主と協議す。

8月24日（雨）

午前中雨にて作業中止，報告会の準備を行なう。午後8号人骨のとり上げ完了す。

8月25日（曇ときどき晴）

午前中A地区平板測量の仕上げ，パネル撤去，報告会準備，午後報告会（午後1:30～16:00，会場封戸小学校講堂，講師賀川光夫，橋昌恒）を行なう，参加者約300名，非常に

盛況であった。

8月26日（晴）

現場の器材，設営の撤収，借用器材の返却および平板測量B・Mの測定を行なう。

8月27日（晴）

現地撤収，解散。

調査期間を通じて天候に恵まれなかったが，調査面積を限定することができたので作業は予定どおり進んだ。また人骨の多数の出土により地域住民の関心が高く，それが報告会によって盛りあげられ，文化財保護思想面で大きな成果があったといっていよいであろう。

II 遺跡の環境

立石貝塚は、大分県宇佐市の東南端、日豊線宇佐駅の東南山麓より流れる田箇川の上流扇状地上に存在する。この地域は、瀬戸内海の西域に突出する国東半島の西側頸部に位置し、半島の一部に含まれる豊後高田市・山香町と宇佐市が隣接する部分である。また分水嶺によって区画された律令時代の国名によれば、北九州市戸畑区附近より宇佐市までの、周防灘に面した多くの平坦部を有する地域が豊前国である。

図幅内において山地の性格が最も強みられるのは、東南部の華岳（標高593m）を中心とした、国東半島の基部に相当する地域である。東北部には、半島を形成する阿子山系の放射状開析谷が山麓部へ伸びている。

その下流が宇佐市の東部を北流する寄溜川は山香町雲ヶ嶽山系を源とする向野川と合流し、さらに周防灘に注ぐ付近では桂川・田箇川と河口をともにしている。豊後高田市の中央部を流れる桂川の上流は、山麓部において、阿子山より流れる北部の都甲川と、阿子山・華岳の阿山系を隔てて北流する南部の田染川が合流している。その流路沿には、高宇田来里跡⁽¹⁾をのせるような一連の谷底平野の発達をみる。寄溜川・桂川の下流域には、三角洲・海岸平野（宇佐市新地・松崎地区）自然堤防（高田市街地）砂堆（宇佐市厳保・久兵衛地区附近の海岸地帯）干拓地（宇佐市岩崎地区より南・北鶴田にかけての寄溜川流域と、高田市貝崎・石郷地区の海岸地帯）などからなる平坦地が発達しており、前記した谷底平野とともに水田地帯として利用されている。この平坦地と阿子山・華岳の山麓部の間には、標高10m～40mの台地が介在する。これらを成因的にみれば、図幅内東北部の豊後高田市黒松・本村地区一帯の海岸段丘を除くほとんどが海成段丘である。

当地域の先史・古代主要遺跡の分布は、山岳仏教に関するものの以外は、ほとんどこの台地上に確認することができる。

大分県北部の主要古墳としては、宇佐市駅

川流域の赤塚・春日山古墳群⁽²⁾があげられるが、豊後高田市周辺の地域にも重要な古墳が存在する。

豊後高田市大字草地字黒松に所在する鑑堂古墳⁽³⁾は、江戸時代末に発掘された直径約20mの円墳であった。船載の神人画像鏡が現存しており、古墳時代前期の築造年代をもつと推定される。同じく前期に属するものとしては、大字新栄に所在する入津原丸山古墳⁽⁴⁾と大原古墳⁽⁵⁾、イド山古墳群⁽⁶⁾があげられる。丸山古墳は、墳長約55mの規模をもち幅20mの肩濠をもつ典型的帆立貝式の古墳であり、玉類などの発見が伝えられている。また大原古墳は、墳丘の一角が採土によってくずされているが、全体形は一辺約12mの方形墳の可能性も考えられる。イド山古墳は最大径約35mの円墳2基を主体に箱式石棺を有する円墳群で11基を数える。

古墳時代後期に属する代表的なものとしては美和台地の南西部に位置する鬼岩屋古墳⁽⁷⁾と、都甲川・田染川が合流する地点の北側台地の堤跡に見られる穴瀬横穴群⁽⁸⁾がある。前者は周囲が削られているが、巨石を使った西国東地方で代表的な横穴式石室墳である。後者は、今日まで19基が確認されているが、そのうちの数基の墓門には幾何学的に赤色の彩色文様が施されている。

弥生時代の遺跡としては、主要なものがほとんどみられず、わずかに桂川・田箇川の中・上流域に散布地が確認されているにとどまる。

弥生時代の主要遺跡が数少ないのに比し、本地域は県内でも縄文時代後期の貝塚が最も集中しており、東木竜七博士による先史地理学上の研究などによって、古くからその重要性が周知されている。これらの貝塚は、前述した台地の端部及び台地を後背部にもつ微高地上に立地している。森貝塚⁽⁹⁾、来福貝塚⁽¹⁰⁾は立石貝塚⁽¹¹⁾とともに古くから基礎的調査がなされており、縄文後期の土器などが出土する貝塚として周知されている。しかし黒松貝塚⁽¹²⁾、入津原貝塚⁽¹³⁾、

水崎貝塚^⑧については、今日までそうした調査もなされておらず、詳しい時期は不明である。今後の調査が急がれる貝塚である。宇佐市大字青森地区に在る石原貝塚^⑨は、昭和48年11月、大分県教育委員会によって、改田工事に伴う緊急調査が行なわれた。調査の結果縄文時代晩期の人骨、土偶をはじめとする、縄文時代後～晩期の土器片、石器および弥生時代前期末の土器片などが発見された。この貝塚で注目されるのは他の縄文時代貝塚がほぼ標高10～20mの位置に立地するのに比し、標高約3.5mと低位（微高地）に立地していることである。このことはこの地域におけるその後の隆起、沈降などの地盤変動を考えないかぎり、石原貝塚が当時の海岸線にもっとも接近していたと推定される。

立石貝塚は華岳に源を発する田笛川が形成する小扇状地のほぼ中央に位置する。貝塚は北流する田笛川の西岸に近く、水利の便はきわめて良好であったと思われる。しかしその位置する標高20mの高さは、前述の貝塚中最高位を示

し、石原貝塚の位置する標高を考慮するとき、当時の海岸線から最も遠距離に立地することを示す。現在扇状地はよく水田化され、貝塚より南側上流部に畑地が目立つにすぎない。田笛川の東側に沿って豊後高田市大字界、宇佐市大字立石の集落が存在する。標高10mの等高線は界部落の東にまで湾入し、扇状地の堆積作用も考えて当時の海岸線は田笛川に沿ってかなり浸入していたとも推定される。

註

- (1) 東木竜七「瀬戸内海西域周防灘南部の成因論」『地理学評論』5巻1号 1927
- (2) 樋口清之「大分県西国東郡河内村森貝塚の研究」『史前学雑誌』3巻1号 1931

参考文献

- 武久義彦他「地形・表層地質・土壌」一字佐一（土地分類基本調査）『経済全図』1968
大分県教育委員会編「豊後高田市埋蔵文化財分布一覧」1973
賀川光夫『大分県の考古学』吉川弘文館1971



第1図 立石貝塚周辺主要遺跡と地理の環境

- ① 鑑堂古墳
- ② 黒松貝塚
- ③ 入津原貝塚
- ④ イド山古墳群
- ⑤ 入津原丸山古墳

- ⑥ 大原古墳
- ⑦ 穴瀬横穴群
- ⑧ 鬼岩屋古墳
- ⑨ 高宇田築里跡
- ⑩ 森貝塚

- ⑪ 来郷貝塚
- ⑫ 水崎貝塚
- ⑬ 立石原貝塚
- ⑭ 立石貝塚

- 縄文時代貝塚
- 弥生時代遺跡
- 古墳
- 横穴古墳群
- 築里跡
- 標高10m等高線

Ⅲ 遺跡の概要

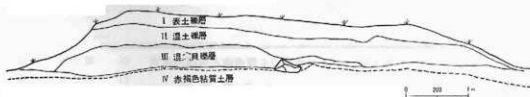
立石貝塚の発掘調査は、A地点である水田中に塚状を形成している貝塚と、それより約40m南方の畑地であるB地点の2地点にわたり実施された。A地点は、水田中に高さ1m、幅4m、長さ9mの長軸をほぼ南北にとる楕円状に貝塚が遺存している。地主の話によると、以前はもっと広範囲にわたっていたとのことである。しかし現在では、前述したような状況である。貝塚は、全体を大小の礫で被われている。したがって、第Ⅰ層は表土礫層と言うことができる。第Ⅱ層はやはり第Ⅰ層と同様に多くの礫を主体とする層であるが、ただ第Ⅰ層と異なる点は、黒褐色の土砂を含むことである。しかし、この黒褐色土も貝塚を被うように堆積したものとは考え難く、風雨により周辺の土砂がたまつたものと考えられる。つまり、第Ⅰ層と第Ⅱ層の境界がはっきりせず、そのまま第Ⅱ層の貝層まで続く、黒褐色土混入の礫層と第Ⅱ層は言える。第Ⅲ層は混土貝層である。第Ⅲ層も、第Ⅰ、Ⅱ層と同様に多量の礫を混入し、若干の暗褐色土を含む。この貝層から考えると、A地区は、貝塚の縁辺部と思われ、貝塚の北方部では、貝層は薄くなり消滅している。この貝層の下第Ⅳ層はすぐ地山となっており、宇佐地方にみられる、赤褐色粘質土層が現われてくる。人骨は、この地山を掘り下げ土坑を設け、埋葬されている。



第2図 A地区貝塚の堆積状況

以上のことから考えて、第Ⅰ、Ⅱ層の礫は、広範囲にわたり存在したと思われる貝塚を後世の人々が開墾する際、出てきた礫を積みあげたと思われ、人骨が多量に出土するこの部分のみ放置され残されたと考えられる。

B地点はA地点に南接する一段高い畑にグリットを設定し、調査したため、A地点とは層序が全く異なる。第Ⅰ層は耕作中の表土層である。第Ⅱ層は、茶褐色粘質土層でかなり硬い層である。第Ⅲ層は、小石を多量に混入する暗褐色粘質土層である。そして、第Ⅳ層は黄褐色粘質土層の第Ⅲ層より大きめの礫を混入する土層である。第Ⅴ層は、黒褐色粘質土層であるが、第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ層が、整然と堆積しているのに対し、この第Ⅴ層は傾斜し、他の層とは異なる。また、地表より1mの下部より、水が湧きこのB地点が川と密接な関係を持ち、形成され



第3図 貝塚西側土層断面図

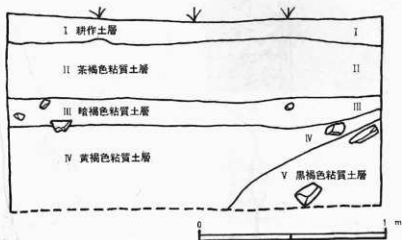


第4圖 立石貝塚地形實測圖

たことが考えられる。なお、遺物は少ないが、出土する位置は、第Ⅱ層下部から、第Ⅲ層にかけてである。B地点は、湧水のため、A地点で見られた、貝層直下の赤褐色粘質土層まで掘り下げることができなかったが、A地点よりわずかにB地点が高いため、B地点の第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ層は、赤褐色粘質土層の上に堆積さ

れた層と思われる。

なお貝塚部を中心とした立石貝塚縄文期の居住地は土器の散布、包蔵状態からみて貝塚南側一帯に広がるものと推定され、現状の地形からいってもなお有望な遺跡であり、今後の調査によっては住居等の検出も期待される場所である。



第5図 B地点北側土層断面図

IV 遺 物

1. 土 器

当遺跡の土器はA地点である貝塚、B地点の畑のトレンチ、それに田苗川の川原に地主が以前捨てたと言われる土砂より採集することができた。A地点の状態は層序をみると表面を水田中より出たと思われる硬が山積みされている。そして、その直下に疎密りの土層がありその貝層も、4体の人骨の埋葬のためか、かなり攪乱を受けている。B地点の層序はA地点より安定はしているが、遺物出土数も少なく、しかも細片であるため良好な資料を得ることはできなかった。また、田苗川の川原より採集した遺物は、地主の話によると、捨てた貝塚の土砂中のもつと言うことである。以上のような状況であるから土器の前後関係を層位的に確認することはできず、出土土器を分類することにより、当貝塚の形成された時間的な幅を考えてみたい。

当貝塚の出土土器は大きく6類に分類できる。

(1) 第Ⅰ類 (第6・7図)

第Ⅰ類は磨消縄文、及びその系統の土器である。この第Ⅰ類、磨消縄文土器は、九州、瀬戸内地方の縄文時代後期において、断片的に幾つかのタイプに分類されている。この立石貝塚出土の第Ⅰ類に分類された土器群もこれと同様、幾つかに分類できる。

第Ⅰ類 a (第6図1—9)

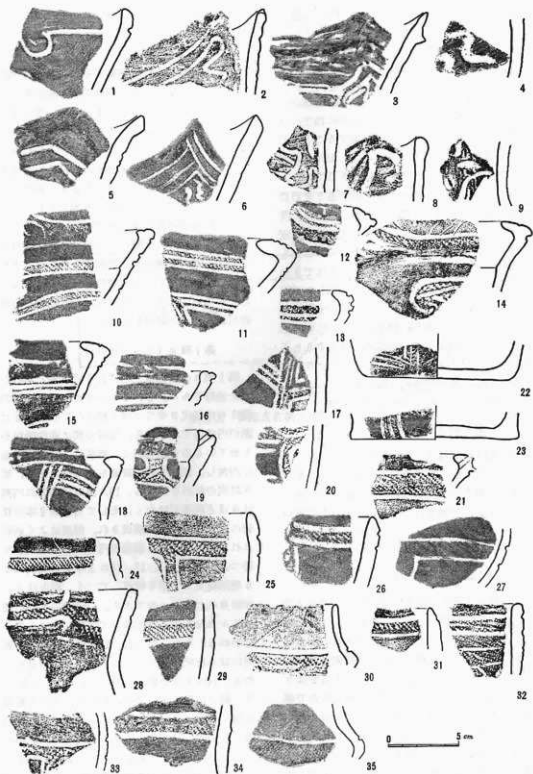
第Ⅰ類 a は瀬戸内地方で見られる中津式土器と、その併行形態の土器と思われる。1は口縁部が波状をなしている精製土器である。器面は沈線文により文様を構成し、その内側を細い縄文により埋めている。2、3、5、6もやはり口縁部が波状をなすが、文様は沈線文のみで構成されている。2は口縁下に平行に沈線文があり、波状部の頂上に刻み目がある。3は口縁に平行に凸帯文がつけられている。その下部に沈線文により文様を構成する部位を持つ土器と思われる。5、6は波状口縁に平行に2—3本の

沈線文を持ち、6から推測すると、その下部にやはり沈線文により文様を構成する部位を持つと思われる。次に4、7、8、9は、2、3、5、6と比較して若干太めの沈線文を曲線化することにより文様を構成している。8が口縁部である以外は全て胴部である。これらの土器もやはり、口縁部が波状をなす1がよく研磨されているのに比べ、他は条痕文を地文とし、その上に、沈線文により文様を描いている。

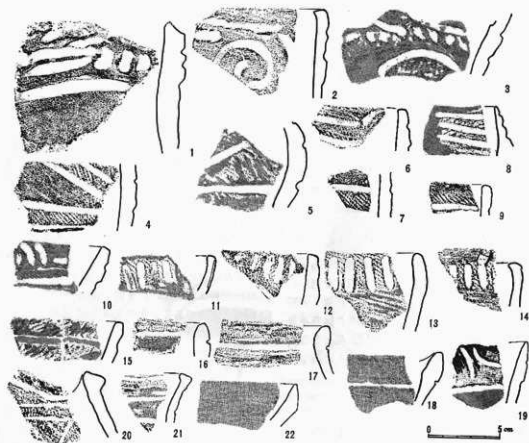
この第Ⅰ類 a に分類した土器群に対比される土器は、瀬戸内地方にその根源を求めることができるが、九州ではその報告例はあまりなく、わずかに北九州市永大丸貝塚、大分県中津市植野貝塚等にその類例がある。

第Ⅰ類 b (第6図10—23)

第Ⅰ類 b の土器は、福田KⅡ式土器と思われる土器群である。2、3本の沈線により、磨消縄文を曲線化させて文様を構成している。また瀬戸内地方でみられる、沈線の間に赤色塗料をうめているのも見られる。器形は、口縁部が急に内湾し、胴部内側に稜線を持つのもあり、植木鉢状の鉢形を呈する。10、16は口縁部の内湾はきほど顕著ではなく、そして文様は2本の沈線による磨消縄文で構成され、器面はよく研磨されている。10は、胴部の内側に1本の稜線を持つ。11、12、13、15、18は3本の沈線文による磨消縄文で文様を構成している。器面はよく研磨された精製土器である。口縁部の内湾状態は各々異なるが、器形は全て鉢形を成すものと思われる。なお、11、12、13、18の土器の沈線内には赤色塗料がうめられていた痕跡が認められる。14は土器の磨滅が激しいが他の土器より、縄文の目が荒いように思われ、文様も粗雑な観がする。19、20は、2本の沈線により磨消縄文を構成し、口唇部に2つ穿孔がうかがわれる。17、20は胴部であるが、この2点も前述の口縁部同様に3本沈線で磨消縄文を構成している。22、23は福田KⅡ式土器の底部である。



第6図 立石貝塚出土器土拓影，実測図（I類その1）



第7図 立石貝塚出土土器拓影，実測図（Ⅰ類その2）

底部まで、2—3本の沈線による磨消縄文がみられることは、文様が器面全体に及んでいることを推測させる。この第Ⅰ類bに分類した土器は、第Ⅰ類aに比較すると、全体的によく研磨された瀬戸内地方の土器である。東九州では、北九州市山鹿貝塚⁽³⁾、大分県森貝塚⁽⁴⁾、同県ワラミ⁽⁵⁾遺跡等に見られる。

第Ⅰ類c（第6図24—35・第7図7・9）

第Ⅰ類cに分類した土器は磨消縄文が直線化したものである。これは数種類、異なるものも含まれる。24、30、35は器面を研磨したうえ焼成法が異なると思われる、九州において縄文時代晩期に顕著にみられる黒色研磨土器と類似した色調を呈し、器壁は薄い。しかし、35は他の2点より器壁は厚い。器形は浅鉢形を呈すると思

われ、口縁部の径はかなり大きい。24は磨消縄文部に赤色塗料をつけていたことが認められる。25、27、33は黄褐色を呈し、あきらかに24、30、35とは焼成、製作方法が異なる。器形は口縁部が直口する形態を呈する。25、28、29、31、32、第7図7・9は、以上述べてきた第Ⅰ類cの土器とは若干異なり、厚手、しかも器面も研磨されてない。また沈線も幅が広く、黄褐色を呈している。

以上の第Ⅰ類cの土器は、山口県月崎遺跡⁽⁶⁾の例などから考えると、第Ⅰ類bにあげた、福田KⅡ式土器の併行土器と考えられる。しかし、その文様構成、厚手土器の混入などから考えて一応第Ⅰ類bの範囲からはずして第Ⅰ類cとして分類した。

第Ⅰ類 d (第7図1・2・3・4・5・6・8・10)

第Ⅰ類 d は第Ⅰ類の中でもその占有率は低い。文様構成、器形、磨消縄文などから考えると、愛媛県平城遺跡、大分県小池原貝塚⁽⁷⁾、同県森貝塚出土土器と類似した資料と思われる。Ⅰは磨消縄文こそないが、明らかに相伴する土器と考えられる。太い沈線により文様を描き、また器壁も厚くよく調整された精製土器である。3は口縁部近くの破片であり、4・5は胴部である。これらの土器片の文様である縄文の擦りは、他と比べ大きく特徴的である。

第Ⅰ類 e (第7図11—14)

第Ⅰ類 e の土器は全て口縁部の破片である。文様としては、口縁部に集約的に縄文を施し、その上から、口縁に直角になるよう凹線を連続的に施している。器形は、内湾ぎみの鉢形を呈すると思われる。全体からみれば、量は少ないが、第Ⅰ類 d と同様、文様構成が他とは異なるので、別扱いにする。

第Ⅰ類 f (第7図15—22)

第Ⅰ類 f は擬似縄文の施されている一群の土器を示す。この擬似縄文はカワナナ、ヘナタリなどの巻貝類を回転させることにより、器面に文様を構成させている。ここであげるものは全て口縁部であるが、器形も内反するもの、外反するもの、山形状になるものなどがバリエーションに富むが、全体の器形は、大分県小池原貝塚、ワラミノ遺跡などでみられる口縁部と胴部に集約的に縄文を施した深鉢形と同じ形態と思われる。

(2) 第Ⅱ類 (第7図2, 3図1—14)

第Ⅱ類は凹線文、沈線文などで文様を構成した一群の土器を示す。またこの第Ⅱ類も、第Ⅰ類と同様、数種類に細分できる。しかも時間的幅が広いと思われ、後期初頭より、中葉に至るまでの期間が考えられる。

第Ⅱ類 a (第7図2, 8図1・2)

第Ⅱ類 a は太い幅の広い凹線により文様を構

成する土器である。当貝塚よりは、総数3点と少ないが、その時間の上限を考えるうえで、中津式土器と同様、意義があると思われる。まず2図2であるが、文様は凹線文により、渦巻状を描き、後期の小池原上層式などと相伴するかのように思われるが、器形は頸部のない深鉢形土器形態を呈し、一応中期の残存形態と考えられるので、Ⅱ類として分類する。第8図1は明らかに中期の影響を受けた土器と言える。凹線の先端を曲げその押えた部分は土器の内側に突き出るようになっている。器形は口縁部に突起部を設け、その頂部に刻み目を持つ、そして頸部はあまりくびれない深鉢形の形態をとる。また、文様のある部位も、口縁部にのみに集中するかに思われるが、破片が口縁部のみであるため断言はできない。8図2は赤褐色を呈する胴部の破片である。その文様は前記の土器より、さらに退化した様相を呈する。破片は胴部より比較的、口縁部に近いと思われるが、やはり8図1の土器と類似した器形を呈する。

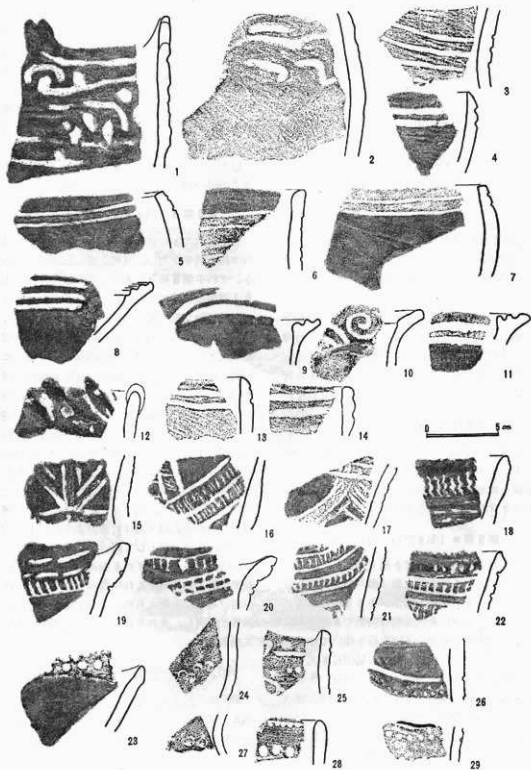
以上の3点は暦年上、中期か、後期に入れるかは多少問題はあがあるが、立石貝塚では他の土器との関係から考えて、後期初頭に位置すると考える。

第Ⅱ類 b (第8図3—7・13・14)

第Ⅱ類 b の土器は、口縁部に平行に、数本の平行沈線文を施し、文様とした土器である。このうち、条痕の地文の上に文様を施したものの3・4・13・14、文様を描いた後、器面を研磨したものの5・6・7の2種に細分できる。器形は口縁部が直口するものと内湾気味になるものと2種類ある。なお3は頸部に3本の沈線文を持つものであるが、ここでは一応第Ⅱ類 b として分類する。条痕の状態などから考察すると、小池原上層式土器などに相伴するものと思われるが、破片が小さいため、全体の器形を知ることには困難である。

第Ⅱ類 c (第8図8—11)

第Ⅱ類 c は、口唇部に深い沈線文を持つ土器である。製作の段階でかなり入念な研磨が行な



第8圖 立石貝塚出土土器拓影，実測圖（Ⅱ・Ⅲ類）

われ、そのうえ焼成の段階でも第Ⅰ類cの(第6図24・30・35)と同じ方法で行なわれたと思われる、九州地方の縄文時代晩期にみられる黒色研磨土器に色調が類似する。8は皿状の浅鉢形を呈する。口唇部には3本の沈線文が平行に施され、その間には赤色塗料が埋められた痕跡がある。9は口唇部に2本の太い沈線による文様が描かれた土器片である。器面はよく研磨されており、黒色研磨土器に最も類似している。器形はおそらく、深鉢形になると思われるが、土器片が細片であるため断定はできない。10、11もやはり9と類似した資料であるが、10は口唇部で沈線により渦巻状の文様を持つ、11は深い沈線により、口唇部に文様がつけられており、その間には赤色の塗料が埋められていた痕跡がある。

以上の土器片は細片であるため、全体の器形を知ることには困難であるが、これに類似した資料は福岡県山鹿貝塚、広島県岩田遺跡、岡山県津雲貝塚などでみられる。以上の遺跡から考察すると、津雲A式に伴う土器と考えられる。

(3) 第Ⅲ類 (第8図15—29)

第Ⅲ類の土器は、いわゆる刺突文のある一群の土器である。文様を構成する方法は、貝殻の腹縁を器面に刺突させるものと、他の施文具を刺突させ文様化させる2種類がある。

第Ⅲ類a (第8図15—22)

第Ⅲ類aは貝殻の腹縁を施文具として用いた土器である。これらの土器は瀬戸内地方でみられる福田KⅡ式土器と関係があると思われる。というのは福田KⅡ式土器の特徴である3本沈線を基本として器面全体に文様を描いているという共通点があるわけである。福田KⅡ式土器は沈線文の間を縄文で埋めるのに対し、この第Ⅲ類aの土器は貝殻の腹縁を刺突し空間を埋めている。15は底部近くの破片である。16・17・21は胴部の破片であるが、3本の沈線の間貝殻刺突文を持っている。20は外反し波状をなす口縁部である。口縁下に若干の隆起帯を設け、その上に貝殻刺突文を施している。22は直口す

る縁部である。これも20同様、口縁下に若干の隆起帯を設け、そこに貝殻刺突文を施し、口唇部にも浅い刻み目がみられる。18は沈線文を持たず、貝殻の腹縁を連続的に刺突することで文様化させている。19は、短い沈線文を連続化させたものと、沈線と貝殻刺突文とで、文様を構成させた、若干外反ぎみの波状口縁の破片である。

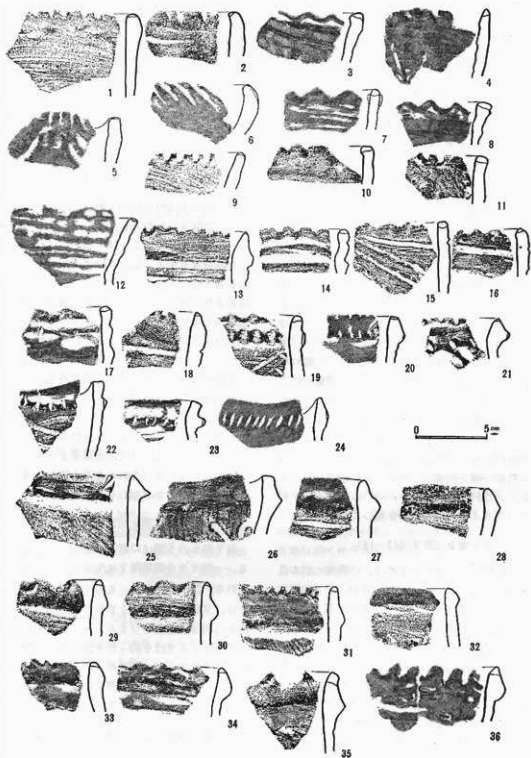
以上の貝殻刺突文は、瀬戸内地方の福田KⅡ式土器の一種として存在すると考える。

第Ⅲ類b (第8図23—29)

以上述べてきた貝殻施文土器より他に、貝殻以外の施文具を使用し、文様を施した土器がある。それを第Ⅲ類bとする。これは施文具により3種類に細分できる。23・25・28・29は断面が円形の施文具で施されたものである。これらは口縁部に平行に刺突文を連続的に施し、刺突連点文としている。23は波状になる口縁部下に一系列の刺突連点文を施された文様帯を持つ。25も同様に口縁部であるが、23が外反するのに対し、これは直口する。器面には沈線文と、刺突文による文様をもつ。28も口縁部である。これは口縁直下に二列の刺突連点文と、その下に若干大きめの、もう一系列の刺突連点文の帯をもつ。29は胴部の破片であるが、沈線とそれに平行に刺突連点文を設けることにより文様を構成させている。24・25は竹管のような、中の空洞のものを施文具として用いたと思われ、真ん中が残っている。いずれも胴部の破片である。最後に26であるが、これは先端が鋭利な施文具が用いられたと考えられ、「八」字状のものを強烈と刺突し、それを囲むようにして太い沈線文がある。

(4) 第Ⅳ類 (第9図1—18)

第Ⅳ類に分類された土器は口唇部に刻み目のある土器である。立石貝塚出土のこの口唇部に刻み目のある土器は全体からみても、かなりのパーセンテージを占め、この地域、またはこの時期の特色といえる。縄文時代後期に口唇部に刻み目を持つ土器は、山口県月崎貝



第9图 立石貝塚出土土器拓影，实测图（Ⅳ・Ⅴ類）

塚、福岡県山鹿貝塚、永犬丸貝塚、荒田比貝塚⁽⁸⁾などでみることができる。当貝塚出土のこの第Ⅳ類土器は細片であるが大きく2種類に細分できる。それは口唇部に刻み目を持つもの土器と、口唇部に刻み目を持ち、さらに沈線文を加えて文様を構成した土器である。

第Ⅳ類 a (第9図1—11)

第Ⅳ類 a の土器は前述した、無文で口唇部に刻み目のみを持つ土器である。1・2・4・5・9・10・11は口唇部にほぼ等間隔に浅い刻み目がならび、口縁は直口する。5は口縁部が山形をなし、その突起した頂上部にのみ数カ所の刻み目を持つ。4・11はかなり先端の鋭利な施文具で刻み目を施したと思われ、幅が狭く、深く刻み目が入っている。3・7・8は太い施文具で刻み目を施したと思われ、押えつけた部分の粘土が、土器の内側と外側にはみ出るようになっている。これも口縁部は直口すると思われる。器面は前述のものが貝殻条痕で調整したことがうかがわれるのに対し、この3点はヘラ状のもので器面調整が行われた痕跡がある。6は口縁部が内湾する土器である。この刻み目は刻み目と呼ぶに問題はあがるが、一応ここでは刻み目の一種と理解し、第Ⅳ類 a の範囲に入れておく。これは口縁に対し、斜めに短い沈線を刻みつけるようにして文様を施している。

第Ⅳ類 b (第9図12—18)

第Ⅳ類 b に分類した土器は、口唇部に刻み目を持ち、さらに器面に沈線文を持つ土器である。12は器壁のかなり薄い口縁部の破片である。口唇部に刻み目を有し、器面にも幅の広い、凹線文がある。13・15・16・18は刻み目のある口縁下に口縁部と平行にしっかりした沈線がある。器形は全て口縁部が直口する形態を呈するように思われる。14・17は比較的大きな刻み目を口唇部にもち、その下に幅の広い、凹線文による文様を持っている。

以上が口唇部に刻み目を持つ土器の分類であるが他にも多く口唇部に刻み目を有する土器は出土している。しかし、それは他の土器と分類

上兼ねる場合があるので他の類に入れ分類することにした。

(5) 第Ⅴ類 (第9図19—36)

第Ⅴ類は口縁部を肥厚させたもの、または張りつけ凸帯を設けた一群の土器である。この第Ⅴ類の土器はその中でもさらに3種類に細分することができる。

第Ⅴ類 a (第9図19—24)

第Ⅴ類 a に分類された土器は、口縁部に凸帯または肥厚させた部分を作り、その部分に刻み目を有する土器である。19・20・21は口唇部にも刻み目を有する。21は口縁直下に、太い粘土紐を張りつけて凸帯とした土器である。口縁部は若干外反きみになる。22・23は同じく刻み目凸帯のある土器であるが、口唇部に刻み目はない。24は波状口縁になると思われる土器片である。そして口縁部を若干肥厚させて、そこにほぼ等間隔に刻み目をつけた土器である。

以上述べた、刻み目凸帯を有する土器は、立石貝塚ではその出土量こそ少ないが、その特異な形態は東九州ではあまりみられない。これに類する土器は、福岡県荒田比貝塚より出土した土器に求められる。それによると御手洗A式土器との関連がうかがわれる。

第Ⅴ類 b (第9図25—28, 32)

第Ⅴ類 b の土器は口縁部が肥厚した土器である。一部にその肥厚部下に沈線による文様がみられる。25・28・32は、この土器片よりみる限りは、文様は他にないと思われる。口縁部が直口すべ深鉢形土器を呈する。26・27は肥厚部下に沈線による文様を持った土器である。26は波状口縁をなす。27は肥厚部下に平行に一本沈線が入るようである。32は長く伸ばした口縁部を外反させながら肥厚させている。

第Ⅴ類 c (第9図29—31, 33—36)

第Ⅴ類 c の土器は、口唇部に刻み目を有しその直下に粘土を張りつけたり、隆起させ肥厚させた部分を持つ。器形は口縁が直口する深鉢形

を呈する。製作過程において、あまり入念な作り方はされなかったと思われ、全て粗製である。刻み目の入れ方は、第Ⅳ類と同じである。

(6) 第Ⅴ類 (第10図1—12)

第Ⅴ類に分類した土器は、条痕文及び無文土器である。本来なら、条痕文と無文とは別種のものとして分類すべきであるが、この立石貝塚では、何らかの状態で条痕が残っており、その判断が困難であるため、条痕文、無文土器として一括して分類する。この第Ⅴ類は、土器の器形により、大きく3種類に細分が可能である。それは、口縁部が直口するもの、外反するものそして内湾するものの3種である。

第Ⅴ類 a (第10図3, 5—9)

第Ⅴ類 a は口縁部が直口する土器である。全体的に荒いタッチの条痕が口縁に平行に施されている。器形は土器片が細片であるため判断するのに困難であるが、他の遺跡などから類推して、おそらく頸部のない、底部まで直線的に伸びる胴部を持つ深鉢形土器と思われる。

第Ⅴ類 b (第10図1・2・4)

第Ⅴ類 b は口縁部が外反する土器である。これも、第Ⅴ類 a 同様、口縁部に平行に条痕を施した土器であるが、なかには、その条痕を研磨したものもある。器形は頸部がややくびれた深鉢形を呈すると思われる。つまり、小池原上層式土器などから磨消縄文を取り除き、条痕文を施した土器と考えればよい。

第Ⅴ類 c (第10図10・11・12)

第Ⅴ類 c は、口縁部が内湾する土器である。これも以上述べてきた条痕文土器と同様、口縁部に平行に条痕文が施されている。この第Ⅴ類 c の中でもさらに、口縁部で内湾し、そのまま底部へと続く土器と、口縁部で内湾し頸部をもち、さらに胴部の張ると思われる土器と2種ある。

以上、立石貝塚出土の土器の口縁部や胴部及び、文様のある部分にのみ報告を行ってきた

わけであるが、次に、底部について報告を行なう。

底 部

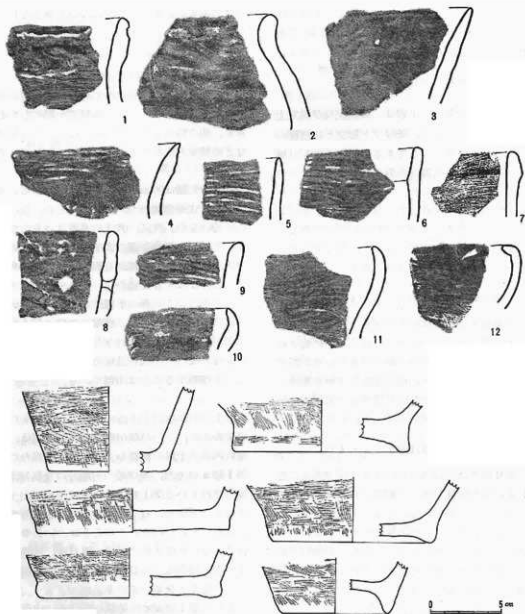
立石貝塚出土の底部は全て、器面に条痕が施されている。このことは、条痕文土器にかかわらず、他の精製土器も底部近くにおいては研磨などの精製方法がゆきとどかなかったためと思われる。

底部の形態は大きく3形態に分類できる。すなわち、底部全体がついてしまうもの、及びそれに近いもの、次に、若干の掘底ぎみをなすもの、そして、極端な掘底をなすものの3形態である。しかし、底部から胴部にかけての角度に、そんなに大きな差のないことなどから考えて、器形による底部の形態的变化というものはそれほど認められない。底部の形態に何らかの変化があることは、それなりの意味のあることかも知れないが、立石貝塚出土の底部よりそのことを推察することは困難である。

以上立石貝塚出土土器について述べてきたわけであるが、立石貝塚が形成された時期は、中期の阿高式土器の影響を直接受けたと思われる第Ⅱ類 a の土器、及び瀬戸内地方の後期初頭に編年されている第Ⅰ類 a の中津式土器が出土していることから、縄文時代後期初頭より形成され始めたと思われる。このことは、いわゆる旧森岡沿岸に形成された貝塚、森貝塚、来籠貝塚より古い時期に立石貝塚付近で、生活が営まれたことを示している。

また、第Ⅰ類 abc に分類している、中津式土器・福田Ⅱ式土器が多量に出土していることから、瀬戸内地方とかなり密接な関係があったことが推測される。

第Ⅳ類において口唇部に刻み目を有する土器が細分できたが、その一部には中期の流れを継承するものを含んでいるのではないかという問題提起をここでしておきたい。



第10図 立石貝塚出土土器拓影、実測図（Ⅳ類および底部）

註

- (1) 1972, 北九州教育委員会「永犬丸遺跡」北九州市文化財調査報告第8巻
- (2) 1957, 賀川光夫「大分県中津市植野貝塚調査報告」中津市教育委員会
- (3) 1972, 山鹿貝塚調査団「山鹿貝塚・芦屋町山鹿貝塚の調査」芦屋町教育委員会
- (4) 1951, 樋口清之「大分県西国東郡河内村森貝塚

- の研究」史前学雑誌3-1
- (5) 1960, 賀川光夫「大分県東国東郡東町ワラミ遺跡調査報告」大分県文化財調査報告第6輯
- (6) 1968, 簡見 浩「月崎遺跡」宇都の遺跡
- (7) 1965, 賀川光夫・橘昌信「小池原貝塚」大分県文化財調査報告第13輯
- (8) 1970, 荒田比呂塚調査団「荒田比呂塚」

2. 石 器

(1) 磨製石斧 (第11図1~5)

1は、最大長約10.8cm、最大厚2.9cmの安山岩製磨製石斧。製作過程については、敲打により形が整えられ、次いで刃部の研磨を行なっている。使用により刃部が破損したために両面からの二次加工によって第2の刃部が作り出されたものと考えられる。全体に磨耗がみられる。

2は、基部が欠損しているために全長は不明だが1とほぼ同じ大きさと推測される。石材は安山岩で、厚さ約3cmあり、整った始刃状の刃部を呈している。片面には研磨が顕著にみられる。

3は、石材は安山岩で、基部が欠損しているが短冊形を呈する。刃部に特に研磨がみられ、中央の大きな剝離と折離によって側面の形態の原形がこわされているが、12と同様の石斧と考えられる。

4は、石材は安山岩で、円柱状の基部のみであるが、その厚さ約3.5cmもある。かなり大形であると推測される。全体にある剝離は浅く不揃であるが石斧製作の際のものと思われる。

5は、4と同様基部のみで石材安山岩であるが色が黒くざらざらしている。基部の先端には剝離面がみられる。

この遺跡では、すべて磨製石斧で占められていることについて、生業の特殊性が問題になるのではないだろうか。またこれらの磨製石斧については、木工具としての剝削機能も備えているとも考えられる。

(2) 剥片石器製品 (第12図6~22)

剥片石器は、すべて姫島産の黒曜石が素材として利用されている。これは、原産地が近くにあることに起因しているためであろう。

a) Scraper (6~13)

6は、縦割ぎの剥片を素材としたものと考えられる。不定型の荒い剝離によって全体の形を調整し、曲がった刃部を有するものである。

7は、縦割ぎの剥片を素材とし、主要剝離面

側からの連続した二次加工が先端部から側面に行なわれている。また自然面がある石器はこの1点のみである。

8は、縦割ぎの剥片を素材とし、主要剝離面側から細かな二次加工が片側面に行なわれており、使用によるものと思われる刃こぼれもみられる。

9は、縦割ぎの剥片を素材とし、基部は欠損している。巾約3.5cm、厚さ約0.9cmあり、主要剝離面側からの剝離は、全体の形を調整を行ない、主要剝離面への剝離は鋭利な刃部を作り出すためのものと考えられる。側面全体が刃器としての機能を果たすと考えられる。

10は、ブレードを素材とし、主要剝離面側からの連続した二次加工により刃部を作り出している。

11は、縦割ぎの剥片を素材とし、主要剝離面側から直角に近い二次加工により刃部を作り出している。

12は、縦割ぎの剥片を素材とし、主要剝離面側から連続した二次加工により刃部を作り出している。10~12は一種の Concave-Scraper と思われる。

13は、横割ぎの剥片を素材とし、blubは主要剝離面への二次加工により打ち欠かれ、刃部は両面からの連続した二次加工により作り出されている。つまみのある横型の石匙に類似した形態を有する。

b) 石 核 (14)

14は、平たん打面を有し、不定型な剝離が行なわれている。また側面にみられる主要剝離面側からの細かな調整加工は、End-Scraper としての機能を有すると考えられる。

c) 器種不明 (15)

15は、基部が欠損しており、全体に不定形な二次加工剝離が行なわれ、石斧の刃部のような形を呈しているため、石核としてよりむしろ石器と考えられる。稜線もかなり磨減している。

d) 石 鏃 (16~22)

16, 17は、いずれも主要剝離面を残す剥片鏃

で横割ぎの剥片を素材としている。16は、主要剥離面側からの二次加工によって全体の形を整えている。17は、周辺にのみ連続した二次加工を行ない形を整えている。厚さ約0.6cmある。

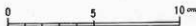
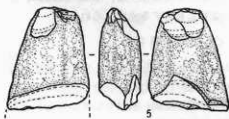
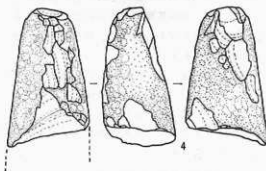
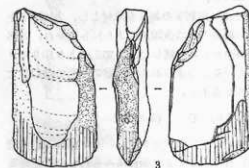
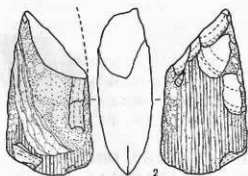
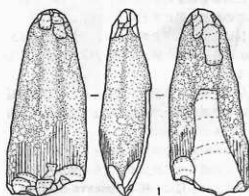
18は、両面全体に丹念な二次加工を行ない、形を整えている。厚さ約0.6cmある。

19、20、21はいずれも押圧剥離による全面加工が行なわれている。3点ともに挟りのない三角鏃で、厚さは、19約0.2cm、20約0.4cm、21約0.7cmである。22は挟りのある大形鏃の脚の部

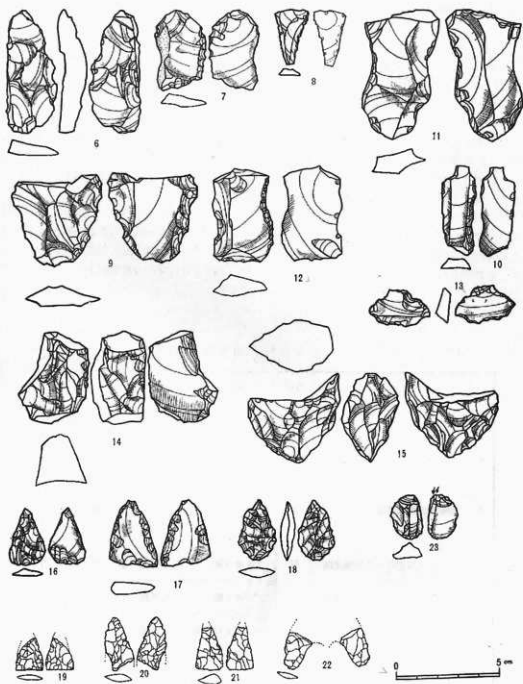
分である。

e) 影 器 (23)

23は黒曜石の比較的厚味のある縦長剥片を素材に用いた影器と考えられる石器である。打面側一端の両面に二次加工が施され、それを打面とした彫刻刀面が一侧辺に沿って二条認められる。



第11図 立石貝塚出土磨製石斧実測図



第12圖 立石貝塚出土剝片石器實測圖

3. 貝 輪

本貝塚からは、骨角製品の出土はみられず、貝製品としてベンケイガイ製貝輪片2点(第14図1.2.)が貝層中より出土し、貝輪未製品とみられるアカガイ片1点(第13図-3)が表層資料中にみられる。

ベンケイガイ製貝輪については、2点とも殻頂部歯丘が残存しないために、原料とした殻の左右の区別はつけ難いが、ベンケイガイ製貝輪の場合、ほとんど円形の環状を呈するため殻の左右の区別が着装した腕の左右を決するとは限らないのではないかと考える。

この時期の貝輪にベンケイガイが多く利用されることの理由のひとつにあげてよいのではないだろうか。

また貝層中の貝の種類中にベンケイガイは完成した貝輪としてのみきり存在しない点に留意する必要があり、ベンケイガイの生息条件とも関連することながら、貝輪の交易の可能性が存在すると言える。

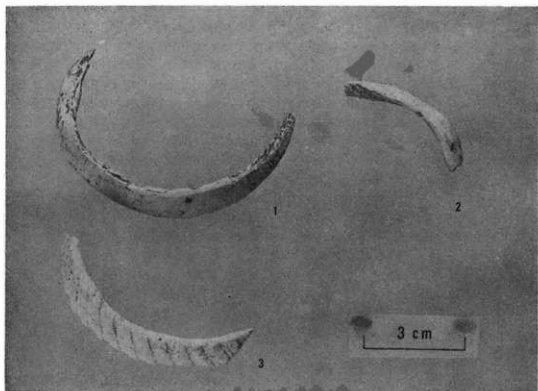
アカガイ製貝輪未製品とみられる資料は、一部に研磨した痕跡を残しているが、残存する殻の腹縁部の形状から、左殻を用いたものとみられる。製作時の打ち欠きの段階で殻にひび入ることが多く、このため研磨の段階で破損したものと考えられる。

貝輪の交易の問題については、各貝塚等の自然遺物の徹底的な分析を加える必要があるが今後の課題である。第1表に現段階においての大分県下縄文文化時代の腕輪出土地名表を付しておこう。

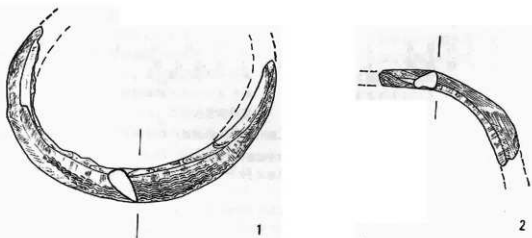
第1表 大分県下縄文文化時代腕輪出土地名表

遺 跡 名	時期	種 類	備 考
1. 中津市植野貝塚	後	ベンケイガイ製 貝輪 4	資 川 1948 ※
2. 宇佐市立石貝塚	後	ベンケイガイ製 貝輪 2 アカガイ製貝輪 未製品 1	
3. 豊後高田市森貝塚	後	アカガイもしくはサルボウ製 貝輪 3	種 口 1931
4. 東国東郡国東町成仏岩陰遺跡	早	サルボウ製 貝輪 2	坂 田 1972
5. 速見郡山香町川原田岩陰遺跡		アカガイ製 貝輪 1	岩尾・酒匂 1964
6. 大分市小池原貝塚	後	ベンケイガイ製 貝輪 2 アカガイ製 貝輪 1	小 池 1973
7. 大分市小池原貝塚	後	土製腕輪 1	後 藤 1964

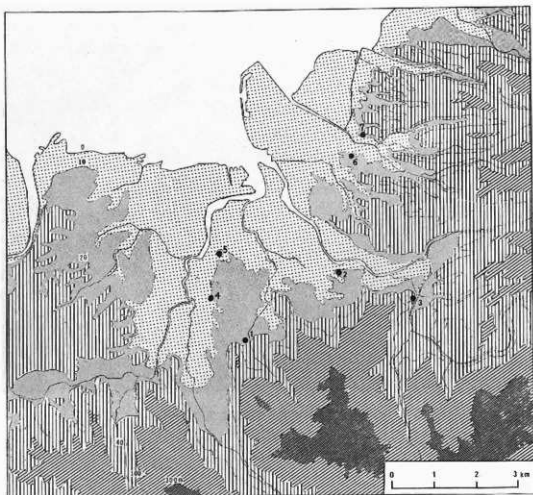
註。※印を付した植野貝塚出土貝輪の点数について賀川光夫氏は8点と報告されているが、貝種等については記されていない(賀川 1948)ので、筆者が実見することのできた4点のみについて掲げた。



第13図 立石貝塚出土貝輪および貝輪未製品



第14図 立石貝塚出土貝輪実測図



第15図 立石貝塚周辺主要貝塚の分布と周辺地形

- | | | | |
|---------|----------|---------|---------|
| 1. 立石貝塚 | 2. 米籠貝塚 | 3. 森貝塚 | 4. 石原貝塚 |
| 5. 水崎貝塚 | 6. 入津原貝塚 | 7. 黒松貝塚 | |

文 献

- 岩尾 松 美 1964 : 「遠見郡山形町大字広瀬川原田洞穴の調査」『大分県地方史』34. (大分)。
 酒 匂 義 明
 賀 川 光 夫 1948 : 『大分県(豊前)中津市植野貝塚調査報告』(中津)。
 小 池 史 哲 1973 : 「小池原貝塚・横尾貝塚出土の自然遺物について」, 『考古学論叢』1, (別府)。
 後 藤 重 巳 1964 : 『みんなの考古学, 大昔の人々の生活—小池原遺跡』(鶴崎)。
 坂 田 邦 洋 1972 : 『国東町文化財調査報告書, 縄文時代に関する研究, 成仏岩陰遺跡の調査』(国東)。
 樋 口 清 之 1931 : 「大分県西国東郡河内村森貝塚の研究」『史前学雑誌』3—1 (東京)。

4. 縄文時代遺物について

立石貝塚出土の縄文時代遺物は砂礫まじりの貝層および発掘前に河原近くに棄てられた土砂より採集されたものがほとんどで、その包含状況や数量は必ずしも満足すべきものではなかった。しかしながら前記のように後期前半の縄文土器とそれに伴う石器類が明らかにされた。当貝塚が九州の東端に所在する国東半島に位置することから、出土土器に極めて瀬戸内的様相の強いことがまず目に引くのである。すなわち第Ⅰ類a・bや第Ⅱ類c、さらに第Ⅲ類aなどの存在は瀬戸内とのかなり密接な交流が考えられる貴重な資料と言えよう。石器については従来九州で後期前半の貝塚・包含層等の発掘調査がかなり実施されているにもかかわらずほとんど不明であるだけに当貝塚出土の石器が注意されるであろう。

(1) 土 器

第Ⅰ類aは瀬戸内の後期初頭に編年されている「中津式」に類似した一群である。口縁部はいずれも山形を呈し、内湾するものと外反するものとがみられる。文様は匏による沈線で構成されており、沈線のみのもつとそれに縄文が組み合わさったものが存在する。大分県内における中津式系統の土器の出土例は非常に稀で中津市植野貝塚⁽¹⁾で知られているのみである。しかしながら北九州においては山鹿貝塚⁽²⁾、永大貝塚⁽³⁾、さらに飯塚市餘田の遠賀川河床等において少量であるが認められる。また最近調査が実施された遠賀郡岡垣町の坂根塚⁽⁴⁾においても中津式がまとまって出土している。この他宮崎県東臼杵郡日ノ影町菅原前谷下遺跡⁽⁵⁾においても数点であるが知られている。以上断片的であるが、中津式系統の土器は福岡県から大分県さらに宮崎県北部と九州の東端に広範囲にわたっているのである。東九州の中期に瀬戸内の船元系の影響が考えられ、それに後続するものとして中津式系統土器の波及が推測されるのである。ただこのような瀬戸内への影響が想定される時期にはたして九州の東端ではどのような土器が製作さ

れ使用されていたかについては現在のところ全くと言ってよいほど明らかにされておらず、大きな問題が提出されるのである。この点については立石貝塚においても、Ⅰ類aとした中津式系統の土器が他のどのグループに伴うのか層位的なセット関係は把握できなかった。しかしながら凹線文の施された阿高式土器の伝統が強く残されていると考えられるⅡ類aが共存するものであろう。中津式系統および阿高式系統の土器の存在から、立石貝塚における生活開始の時期は後期初頭として大過ないものとする。

次に同じく瀬戸内系の土器と考えるものにⅠ類bの一群があり、当貝塚ではかなりのウェイトをもって存在している。口縁部が内湾する鉢形土器を基本形とし、文様は2〜3本の沈線と磨消縄文によって構成されている。胎土・焼成ともに良好で、赤色塗料がつけられたものが含まれる。これらの特長は瀬戸内の「福田KⅡ式」と極めて共通している。これらに類似する土器は県下では小池原貝塚上層、ワラミノ遺跡⁽⁶⁾、森貝塚⁽⁷⁾等において知られているが、いずれも少量でしかも当貝塚ほどの特長は明瞭ではないように思える。その点からも立石貝塚出土のⅠ類bの存在は大いに興味をもたれるのである。福田KⅡ式の影響を考察する際、Ⅲ類aの存在も合わせて考えなければならないであろう。Ⅲ類aに認められる主要な文様構成は2本ないし3本の曲沈線とその沈線間で囲まれた中を縄文でなく、貝殻による刺突ないし刻み日が施文されるのである。これなどは南九州の様相を有する貝殻文系土器に福田KⅡ式の文様が組み入れられたものと考えられるのである。また小池原貝塚の地文に朱痕を施し、沈線と貝殻刺突を施文した土器との類似が求められる。しかも小池原貝塚において最下層より出土していることから、時間的に福田KⅡ式と併行関係ないし、極めて近接した時期が与えられるであろう。

Ⅰ類cも磨消縄文を文様の主体とする一群であるが、Ⅰ類bに比較すると磨消縄文がかなり直線化し、しかも沈線間の縄文帯が狭まっている。口縁部の内湾するものが目立ち、焼成・胎土は良好なものが多い。これらの土器に観

察される特長からだけでは必ずしも連断できないが『津雲A式』との関連が求められそうに思える。ただ津雲A式の特長とされる円を中心に左右に文様帯が広がるものは出土していないので、あるいはⅠ類bのカテゴリーに含められるものかも知れない。津雲A式の影響が認められるものとしてⅡ類cを挙げることができよう。口唇部が肥厚し、その部位に沈線文を施した鉢形土器である。立石貝塚以外で津雲A式系統と考えられる好資料はワラミノ遺跡において知られており、この他森貝塚においても出土している。

以上のように当貝塚においてはかなりのウェイトを占める瀬戸内系の後期前半に位置づけられる土器が存在し、しかもそれらが瀬戸内系のものに極めて類似している点は大いに注目されよう。

一方、東九州の縄文時代後期の前半の中心的存在であると考えられている小池原貝塚出土の磨消縄文や入組沈線文の土器が全般的に少なく典型的なものにいたってはほとんど認められない状態である。第Ⅰ類dがこれに相当するものと考えられる程度である。当貝塚出土で最も顕著なものとして口唇部に刻み目を有する粗製鉢形土器の第Ⅳ類が存在する。しかしながら、これらは小池原貝塚においてほとんど出土してなく、森貝塚で比較的多く見られる程度で東九州の後期に普遍的に存在とは思えないようである。むしろ北九州の永犬丸貝塚、山鹿貝塚、荒田比貝塚等に多く認められている。同じような傾向がⅡ類cとした刺突文の施こされている土器にも言えそうである。県下の縄文後期の代表的な遺跡である小池原貝塚に出土してなく、国東半島の森・来縄の両貝塚にも見られないようである。それらの諸貝塚において認められず立石貝塚では出土しているのは、三貝塚の生活開始の時期が降るためとも考えられる。そうすればⅡ類cの土器は後期初頭に位置づけられることになる。もし時期的に降るものとなれば、Ⅱ類cは東九州に本来存在する一群ではなく、他所からの影響によるものになる。あるいは時期は後期初頭でしかも他から影響を受けた

ものかも知れない。

東九州の後期前半の磨消縄文土器を主体とする土器の編年や変遷についてはワラミノ遺跡や小池原貝塚を軸として賀川兆夫の露微的な研究が概になされている。それらと比較する時、当貝塚出土の土器の様相は余りにも異った点が抽出されるように思えるのである。

(2) 石 器

当貝塚出土の石器類は総計38点を数え、しかもその大多数は石器として認められ、切片は数点を数えるのみである。

第2表 立石貝塚出土の石器組成

磨製石斧	5
石 鏃	8
削器および二次加工の切片	14
彫 器	1
石 核	2
使用痕のある切片および剥片	8

東九州におけるほぼ同時期の諸遺跡に比較すると多いと言えるであろうが、先に分類したどの土器に伴うものかについては全く不明と言わざるを得ない。それでかなり大まかな把握方法が、縄文時代後期前半としなければならない。

磨製石斧5点をのぞく切片石器はすべて乳白色をした姫島産の黒曜石が用いられており、いかにも国東半島のしかも姫島に近い位置に所在する遺跡としては当然のことであろう。

石斧は5点とも共通して安山岩質の石材が用いられている。その製作過程はまず打削によって大体の形が整えられ、次に敲打による細かい調整が施され、最後に刃部を中心とした研磨で仕上げられている。これらの石斧は幅に対して厚味のある形態を呈しており、特に1点は幅・厚さがほぼ同じで乳棒状を呈している。磨製の刃部が観察される2点のうち、1点は片刃に近い形態に仕上げられており、それぞれ木材の伐採・打削の斧や手斧としての機能をはたしたものと推定される。東九州の縄文時代後期前半の諸遺跡における石斧の出土例が少ない中にあって、5点を占める石斧の存在は当時の生活を考

える上で大きな意味をもつもののように思える。

石鏃は8点出土している。縄文時代の各時期に普遍的にみられる基部に挟入が施されたものは脚部の破片1点のみで、他は全て基部が直線的ないし外側に張り出す形態を有している。この形態の違いは狩猟具以外の用途を示唆するようで興味深い。

刮器および刮片の側辺に二次加工を施した石器は14点を数える。これらは不定形な刮片を素材に用いているが特に定型化した形態は認められず、刮片の一端ないし両側辺に二次加工の調整を施して刃部を形成するいわゆるサイドスクレイパーの類である。刃部は直線状をなすものが多いが、中には側辺の一部にわずかな挟入部をみせ、この部位には入念な二次加工が観察される。これなどは彫器と共に木や骨の加工に用いる一種の工具としての用途が考えられるであろう。縄文時代のサイドスクレイパーには側辺の直線的な刃部と共にそれに接する一端を鋭利に尖らせるような加工を施したものが認められ、スクレイパーの一つの機能として動物の解体を示唆するものとの考え方がなされる。しかしながら当貝塚出土の14点の中には顕著なものが見られないのである。先に述べた石鏃の形態の相違、さらに当貝塚出土の獣骨類が極めて少ないことも考え合せて、漁撈生活の中での一つの用途があたえられないであろうか。

彫器1点は東九州の縄文時代後期の遺跡で始めて確認されたものだけに貴重な資料と言える。縄文時代の彫器については最近西北九州の海岸部近く⁽¹⁵⁾の諸遺跡で特に後期を中心としてその出土例が増加し注目されているだけに今後の資料の増加が楽しみである。

東九州において縄文時代後期前半の貝塚や包含層の遺跡は他の時期に比べて調査はある程度行なわれており、先に触れたように土器論については進んだ研究がみられるのである。その一方、石器については出土数自体の少ないことに起因してその成果にみるべきものが極めて少ない。その為立石貝塚出土の石器類を土器のよう

に他の遺跡との関連をまじえて把握することが困難な実状である。

今回の調査で得た石器類は必ずしも満足できる内容をもっていないかも知れないが、今後の研究をつみ重ねる上での一つの比較資料を提供しているものと考えられる。

註

- (1) 賀川光夫 「大分県(豊前)中津市植野貝塚調査報告」中津市教育委員会 昭和30年
- (2) 永井昌文 前川威洋・橋昌信「山鹿貝塚」山鹿貝塚調査団 昭和47年
- (3) 中村修身 「永大丸遺跡」北九州市文化財調査報告第8集 昭和47年
- (4) 潮見 浩 「森崎地方の縄文遺跡・遺物」嘉穂地方史—先史編— 昭和48年
- (5) 福岡県遠賀郡岡垣町に所在する縄文時代後期の貝塚で、昭和47年度に緊急調査が実施されている。鯉ヶ崎式土器出土の層より下位から中津式土器がまとまって出土している。
- (6) 柳田純孝「宮崎県宮原前谷下遺跡の縄文土器」九州始原文化研究会会報1 昭和46年
- (7) 東九州の縄文時代中期は瀬戸内一帯に広がる船元文化圏に入るとの考え方もなされている。前川威洋「九州における縄文中期研究の現状」古代文化第21巻3・4号 昭和44年
最近宮崎県宮崎町六所権現岩陰において船元系の土器が採集されている。キャリバー形をした深鉢形土器で、地文に縄文を施しその上に刻み目のある貼りつけ凸帯と半線竹管による沈線で文様を構成している。地文の縄文は口縁部及び口縁部内側にもおよんでいる。
- (8) この事に関連する遺跡と目されるものに近く最近調査が行なわれた直入郡久住町のコウゴロ松遺跡がある。ここでは阿波式ないし南福式系統と考えられる凹線文を口縁部附近に施した深鉢形土器と条痕地に横式あるいは岩崎式にみられるような沈線を施した土器が相伴している。これらは後期初頭に位置づけられるものと思われる。
- (9) 賀川光夫・小田富士雄・橋昌信「野間遺跡群、横尾貝塚、小池原貝塚緊急発掘調査」大分県文化財調査報告第15輯 昭和42年
賀川光夫「所謂鯉ヶ崎式土器の属位出土の新例

(小池原式の設定)」大分県地方史34巻 昭和39年

- 03 賀川光夫「大分県国東郡国東町ワラミノ遺跡調査報告」大分県文化財調査報告第6輯 昭和35年
- 04 樋口清之「大分県国東郡河内村森貝塚の研究」史前学雑誌3巻1号 昭和6年
- 05 宮崎県南部を中心にみられる縄式土器との類似が求められるようである。特に綾B式に認められる沈線間の擬似縄文は瀬戸縄文系土器が南九州に土着変形することによって発生したのではないかとの推測もなされている。

乙 益重隆・前川威洋「縄文後期文化—九州—」考古学講座3 先史文化 昭和44年

- 03 大牟田市教育委員会「荒田比貝塚」福岡県大牟田市荒田比貝塚調査報告 昭和45年
- 04 ①に同じ
- 05 彫器と考えられる石器の出土している縄文時代後期の遺跡としては、山鹿貝塚、榎坂貝塚(福岡)富江宮下貝塚・深瀬遺跡・脇野貝塚(長崎)などが知られている。これらの遺跡はいずれも海岸部に近くで、共伴の石器として石鏃や石鈎が存在する傾向がある。

5. 自然遺物

貝塚を形成する膨大な量の貝類と、そこに含まれている魚・獣骨などの動物遺存体は、そのほとんどが食物残滓である。従って、動物遺存体等の自然遺物を分析することによって食料採集活動・生活環境等の一端を明らかにすることができるであろう。

本貝塚の自然遺物については、既に樋口清之の紹介(樋口1931)・酒誌仲男の地名表(酒誌1959)に記述がみられるが、表採や小規模な試掘によるものでもあり、出土自然遺物の全貌を明らかにしたものではなかった。

しかし、今回の発掘調査により、貝層から資料を得ることができ、分類・同定を行なった結果を報告する。また、これをもとに立石貝塚を中心に周防灘南岸縄文文化時代後期貝塚からみた食料採集活動についての若干の私見を述べることにする。

発掘調査時の資料採集方法は、骨類・貝類等の任意抽出、貝層の任意ブロックサンプリングによる。また分類方法は、ブロックサンプル等の水洗分類により、斧足類は殻頂部の歯丘を以って左右に分類、腹足類は体層部及び水管部を以って1個体として分類した、魚骨等は残らず抽出した。これにより斧足類は左右の最大値を用いて、各遺存体の個体数を求めた。

遺存体種名表

(1) 軟体動物

class Gastropoda 腹足綱

1. モスソガイ *Buccinum (Volutharpa) perryi* (JAY).
2. バイ *Babylonia japonica* (REEVE).
3. アカニシ *Rapana thomasi* (CROSSE).
4. レイシ *Purpura bronni* (DUNKER).
5. イボニシ *Purpura clavigera* (KUSTER).
6. ハナツメタ *Neverita (Glossaulax) reiniana* (DUNKER).

7. ツメタガイ *Neverita (Glossaulax) didyma* (RODING).
 8. ウミナシ *Batillaria* SP.
 9. ヘナタリ類 *Cerithidea* SP.
 10. マルタニシ *Cipangopaludina malleata* (REEVE).
 11. カワニナ *Semisulcospira bensoni* (PHILIPPI).
 12. カノコガイ *Clithon sowerbianus* (RECLUZ).
 13. スガイ *Lunella coronata coreensis* (RECLUZ).
 14. イボキサゴ *Umbonium (Scechium) Moniliferum* (LAMARCK).
 15. イシダタミ *Monodonta labio* (LINNAEUS).
 16. マイマイ類 *Euhadra* SP.
- class Pelecypoda 斧足綱.
17. オオノガイ *Mya (Arenomya) Japonica* (JAY).
 18. シオフキ *Macra veneriformis* (REEVE).
 19. ハマグリ *Meretrix lusoria* (RODING).
 20. カガミガイ *Dosinia (Phacosoma) Japonica* (REEVE).
 21. オキシジミ *Cyclina orientalis* (SOWERBY).
 22. アサリ *Tapes (Amygdala) Japonica* (DESHAYES).
 23. マガキ *Crassostrea gigas* (THUNBERG).
 24. アカガイ *Anadara (Scapharca) broughtonii* (SCHRENCK).
 25. サルボウ *Anadara (Scapharca) subcrenata* (LISCHE).
 26. マルサルボウ *Anadara (Scapharca) nipponensis* (PILSBRY).
 27. ハイガイ *Anadara (Tegillarca).*

granosa (LINNAEUS).

28. ベンケイガイ *Glycymeris*
(*Veletuceta*)
albolineata (LISCHKE).

(2) 脊椎動物

class Pisces. 魚類綱

1. サメ類 *Plagiostomi*
(Family indet.)
2. エイ類 *Myliobatus*
(or. *Dasybatus*) SP.
3. イワシ類 *Clupidae*
(Family indet.)
4. アジ類 *Trachurus* gen & SP.
(indet.)
5. スズキ *Lateolabrax japonicus*
(CUVIER &

VALENCIENNES).

6. クロダイ *Mylio macrocephalus*
(BASILEWSKY).

7. フグ類 *Tetraodontidae*
(Family indet.)

8. メバル *Sebasloides inermis*
(CUVIER &

VALENCIENNES).

class Reptilia 爬虫綱

1. ウミガメ類 *Chelonia* SP.

class Mammalia 哺乳綱

1. イノシシ *Sus scrofa leucomystax*
(TEMMINCK &
SCHLEGEL).
2. ニホンシカ *Cervus nippon nippon*
(TEMMINCK).

以上の貝類28種・魚類8種・爬虫類1種・哺乳類2種の計39種が、本貝塚から出土した動物遺存体である。本貝塚からはこの他岩石等の自然遺物がみられたが、姫島産黒曜石・砂岩等がブロックサンプル中に検出できた。植物質の遺存体は検出でき得なかった。

以下、動物遺存体の概要を報告する。

第3表 任意抽出による貝類一覧表

種名	層位	表採	I層	II層	III層	計
腹	アカニシ	4	4	18	2	28
	レイシ	0	0	1	0	1
	イボニシ	0	0	3	0	3
	ハナツメタ	0	0	1	0	1
	ウミナナ類	1	1	16	0	18
	ヘナタリ類	2	0	23	0	25
足	カワニナ	1	0	2	0	3
	マルタニシ	0	0	2	0	2
	スガイ	0	0	1	0	1
	インダタミ	0	0	1	0	1
類	マイマイ類	1	1	2	0	4
小計		9	6	70	2	87
斧	オオノガイ	0	0	1	0	1
	シオフキ	0	0	1	0	1
	ハマグリ	5	2	66	2	75
	オキシシミ	1	1	25	0	27
足	マガキ	2	1	22	1	26
	アカガイ※	1	0	0	0	1
	マルサルボウ	0	0	1	0	1
	ハイガイ	1	0	3	0	4
類	ベンケイガイ※	0	0	2	0	2
小計		10	4	121	3	138
計		19	10	191	5	225

註. 各層とも、斧足類は左殻・右殻の最大値をとり、各種類の合計は最大値の合計である。
※印の アカガイは、貝輪未製品と思われる。
またベンケイガイは貝輪である。

第4表 貝層を形成する貝類の組成表

	種名	γ	ℓ	Max	%	年産割合
岩	腹					
	イボニシ			8	0.51	2.50
	スガイ			28	1.77	8.75
	インダタミ			2	0.13	0.63
礫	斧類	282	257	282	17.85	88.13
性	小計			320		100.01
砂	腹					
	モスソガイ			1	0.06	0.08
	バイ			2	0.13	0.16
	アカニシ			11	0.70	0.88
	ツメタガイ			6	0.38	0.48
	ウミナナ類			318	20.13	25.36
	ヘナタリ類			512	32.41	40.83
	カノコガイ			2	0.13	0.16
	イボキサゴ			6	0.38	0.48
泥	斧	2	6	6	0.38	0.48
	ハマグリ	301	316	316	20.00	25.20
	カガミガイ	0	1	1	0.06	0.08
	オキシシミ	68	67	68	4.30	5.42
	アサリ	3	0	3	0.19	0.24
	サルボウ	0	1	1	0.06	0.08
	ハイガイ	1	1	1	0.06	0.08
性	小計				79.37	100.01
淡水系	腹					
	カワニナ			3	0.19	50.00
	マルタニシ			1	0.06	16.67
	マイマイ類			2	0.13	33.33

小	計	6	0.38	100.00
計		1,580	100.01	

註、貝層中の6ヶ所の任意ブロックサンプルを合計し、鹿足類は体腔部及び水管部を、斧足類は殻頂部の歯丘を以て左右に分類し個体数を算出した。

魚 類

今回の発掘調査によって得られた魚類の遺存体は、クロダイの右前顎骨1点を除き、すべて貝層のブロックサンプル中より検出した。分類・同定により下記の結果を得たが、細片が多くこれらの種以外の魚類遺存体の存在する可能性はある。比較標本の絶対量が少ないために完璧であるとは言い難いが、本貝塚の魚類相について相対的に概観することができよう。

1. サメ類, 牙1。
2. エイ類, 脊椎骨1。
3. イワシ類, 脊椎骨2。
4. アジ類, 脊椎骨10。
5. スズキ, 右下顎歯骨1。脊椎骨6。
6. クロダイ, 右前顎骨1。この他脊椎骨1及び歯骨が出土しているが、タイ類のものであること以上の詳細な査定は不可能である。
7. フグ類, 歯骨1。細片のためにこれ以上の詳細な同定は不可能である。
8. メバル, 右前顎骨1。

爬虫類

この種類の遺存体は、貝層のブロックサンプル中よりは検出されなかったが、第1層の任意掘出資料中にウミガメ類の遺存体が1点認められた。

5×5cm程度の破片であり、損耗度も著しい詳細な査定は不可能である。

哺乳類

今回の発掘調査によって得られた獣骨は殆んど細片であったが、分類・同定により下記の結果を得た。

イノシシ	185♀
シカ	145♀
不 明	70♀
計	400♀

1). イノシシ *Sus scrofa leucomystax* TEMMINCK & SCHLEGEL.

1. 頭頂骨 L. I 層
2. 側頭骨 R. 表採
3. 上顎骨・M₂ R. II 層
4. M₁ (上顎) L. I 層
5. M₁ (or. M₂) (上顎) ? II 層
6. 下顎骨 (内側 M₂・M₁ の歯槽部) R. I 層
7. 下顎骨・P₃・P₄・M₁・M₂・M₃ R. II 層
8. I₁ (下顎) L. I 層
9. 肩甲骨, 体 R. III 層
10. 上腕骨, 体 R. I 層
11. 上腕骨 ? 表採
12. 上腕骨, 遠位端 R. III 層
13. 橈骨, 体 L. I 層
14. 橈骨, 遠位端 L.
15. 胸骨, 体 R. III 層
16. 尺骨, 体 R. I 層
17. 尺骨, (橈骨切痕) R. 表採
18. 尺骨, (滑車切痕) R. III 層
19. 坐骨, 翼, 遠位端 L. III 層
20. 大腿骨, 近位端 R. I 層
21. 大腿骨, 遠位端 R. II 層
22. 脛骨, 体 R. II 層
23. 脛骨, 遠位端 R. I 層

2). ニホンシカ *Cervus nippon nippon* TEMMINCK.

1. 鹿角片 I 層
2. 鹿角片 I 層
3. 鹿角片 III 層
4. 橈骨, 近位端 L. I 層
5. 坐骨, 体 R. III 層
6. 大腿骨 ? 表採
7. 中足骨, 近位部 L. 表採
8. 中足骨 ? 表採
9. 中足骨, 遠位部 R. III 層
10. 基節骨 ? 表採
11. 中節骨 ? I 層

なお、不明の獣骨中には齧歯類と思われる小動物の歯及び脊椎骨各1点が含まれている。

自然遺物よりみた食料採集活動について 私の私見

貝塚研究にあって、自然遺物の調査、分析の必要性のあることは既に述べた。筆者は、既に大分県小池原・横尾貝塚出土の自然遺物から古代人の狩猟・漁撈活動を考察した(小池 1973)が、実見できた資料が任意抽出資料であり、保存されていたものに限られていたために十分な成果を得られたとは言えない。

貝塚出土の動物遺存体の研究を充実・徹底させるためには、発掘時に単なる拾い上げを行なう程度の任意抽出資料のみでは不十分であり、少なくともその貝層の数ヶ所から一定の範囲をそのままブロックサンプリングする必要がある。

立石貝塚の調査では、ブロックサンプリングの採集方法が、この意味において必ずしも完璧であったとは言いがたいが、任意抽出資料と併せて、ある程度の分析を可能としたものであった。

本貝塚からは動物遺存体以外の植物遺存体等の食物残滓の出土はみられなかった。植物質食料採集活動関係用器具は磨石の出土がみられる以外、この種の活動に關係する具体的な資料は出土していない。また近傍貝塚からもこの種の具体的な資料はみとめられない。

したがって、縄文文化時代の他の食料採集活動、即ち漁撈活動・狩猟活動について考察しよう。漁撈活動の対象物としては、貝類・魚類・爬虫類が本貝塚にみられ、貝類についてみれば任意抽出資料にハマグリが多く、オキシジミ、マガキ、ヘナタリ類、ウミナナ類がこれにつづく、また第4表に示すようにブロックサンプル中にヘナタリ類・ウミナナ類・ハマグリ・マガキが多く、オキシジミ・スガイ・アカニシがこれにつづく。また生息条件、別にみると岩礁性貝類が20.26%、淡水系貝類が0.38%を示すが残る79.37%が砂泥性の貝類であり、圧倒的に多い。岩礁性の貝類としてはマガキが88.13%を占めるが、岩礁にのみ生息するとは限らず、砂泥性海岸でも小礫や他の貝殻等に付着して

生息することが多くみられる。本貝塚出土のマガキは全般的に小さく、右殻が小礫に数多く群がって付着している資料が幾つかみられること等から、マガキの出土から岩礁とすることには問題があろう。ヘナタリ類・ウミナナ類の数多く出土することも併せて、内湾干潟にあって小礫等の存在するような海岸で捕採されたものと考えられる。また汽水域に生息する貝類は多いが淡水系貝類の出土の少ない点は留意される、また主鹹域に生息する貝類ではベンケイガイが貝輪としてのみきり存在しない等数は少ない。

近傍貝塚と比較してみると、第5表に示すように海岸から遠距離の大分県下毛郡那耶溪町粉岩除遺跡を除いて、中津市植野貝塚・豊後高田市来福貝塚・森貝塚において大体同様の内湾砂泥性の貝類を認めることができる。また周防灘南岸というよりはむしろ別府湾に臨む杵築市東貝塚の資料についてみれば、資料が数少ないが、大体同様の種類であることを呈している。これらの貝塚では任意抽出資料程度の確認にとどまるが、森貝塚に関して第6表に示す、小規模なブロックサンプリングによる組成を知ることができる。これらの比較を行えば、カノコガイの占める割合が森貝塚において圧倒的であり、淡水産のカワナナの数も比較的増大する傾向にあることから、森貝塚が立石貝塚等より鹹度の低いことを知ることができる。これは、時期差による海進海退現象によるものとするよりも、第15図に示す如く、森貝塚の立地条件が桂川と都甲川の合流する地点に近いことと、立石、来福貝塚の面する入江よりも更に奥まった入江に臨んでいることに起因するものと考えたい。

魚類についてみれば、エイ類、アジ類、スズキ、クロダイ、フグ類、メバル等は沿岸底棲魚類であり、サメ類、イワシ類は沖合迴遊魚類と分類できる。沿岸底棲魚類は、一定の游泳範囲内で索餌し航海性をもたないために比較的捕獲は容易である。サメ類は沖合に多く迴遊しているが、サメ類の中には内湾等に生息する種類のものもあり、内湾にまぎれ込むこともある。イワシ類についても大体同様に考えること *

外に類例がない。

この種の活動については資料の増加を待たねばならないであろう。

第15図は、立石貝塚の周辺の地形図を等高線により区分したものであり、現在の海水面以下、標高 $0 \sim 10m \cdot 10 \sim 20m \cdot 20 \sim 100m$ (この間の破線は標高 $40m$) $\cdot 100 \sim 300m \cdot 300m$ 以上と区分した。この区分によると貝塚は $10 \sim 20m$ の間に3貝塚が立地するが、 $0 \sim 10m$ の間は当時の海水部分、 $20 \sim 40m$ 以上は山地帯に該当する。立石貝塚の漁場としては、 $0 \sim 10m$ 区分で貝塚の北北東方向の入江と西方の入江の2ヶ所が考えられ、両者とも周防灘に面する入江に臨むことになる。

爬虫類のウミガメは産卵のために陸地にあがってくる時には捕獲し易い。

狩猟活動についてみれば、哺乳類の遺存体としてイノシシ・ニホンシカがみられるが、同定の結果両者ともそれぞれ同一部位の骨片が存在しないことは注目される。両者とも一頭体分が確実に存在していた程度である。イノシシ・ニホンシカとも山地帯に生息する動物であり狩猟対象地としては、本貝塚の南々東方につづく山地が考えられるが、イノシシ・シカとも遺存体の絶対量が少なく、狩猟用具遺物としての石鏃等の遺物の出土も多くない等の点から、漁撈活動に重きをおいた生活ではなかったとみられる。

これらの生業形態を概要すれば、狩猟活動・植物質食料採集活動とも決定的な遺物の存在しないことと、漁撈活動についても幾種類の魚類遺存体から網漁法の存在した可能性はあるにせよ漁網の確認ができない点から、殊に卓越した活動があるとは言い難い。また狩猟・漁撈・植物質食料採集活動が発達・分業化しているとは言えず、単に環境に適応した採集活動の段階に留まっていたとみられる。

しかし、縄文文化時代後期中葉以降、晩期にかけて環境適応化現象からこれらの活動が盛行し、部分的にはあたかも生業の分業化とみられるような段階になる可能性は高いと言えよう。

ただし、これらの研究には、今後貝屑のプロ

ックサンプルの分類などによって資料の増加すること、多方面からの分析を加えることが急務であることは言うまでもないことである。

本報文を作成するにあたり、別府大学文学部教授賀川光夫氏、平安博物館助教授渡辺誠氏、大阪市立大学医学部助手田中正昭氏、及び別府大学文学部考古学研究室の専攻生諸氏の御協力を頂いた。銘記して衷心より謝意を表する次第である。

註

- (1) 同定にあたっては、平安博物館助教授、渡辺誠氏に御協力を頂いた。
- (2) 同定にあたっては、大阪市立大学医学部解剖学教室助手、田中正昭氏に御協力を頂いた。
- (3) 渡辺 1973, 等による。重量の面で、 $100g$ を超えるものは縄文文化時代の漁網錘としては算ずること。と、他の利用法が考えられること等による。
- (4) 後藤重巳氏教示。

賀川光夫 1948:『大分県(豊前)中津市植野貝塚調査報告』, (中津)。

小池史哲 1973:『小池原貝塚・横尾貝塚出土の自然遺物について』『考古学論叢』1, (別府)。

酒井富蔵 1957:『豊後高田市誌—先史時代—』(豊後高田)。

酒詰伸男 1959:『日本貝塚地名表』(東京)。

樋口清之 1931:『大分県西園東郡内村森貝塚の研究』『史前学雑誌』3—1, (東京)。

渡辺 誠 1973:『縄文時代の漁業』(東京)。

6. 中世のカメ棺

立石貝塚は、その主体を縄文時代後期におく貝塚であるが、後世、幾度か使用されたと思われる、今回の調査の際A地点において1基の中世の甕の出土をみた。その出土状況は、貝層の尽きた部分に、地山である貝層下の赤褐色粘質土層を掘りさげ、主軸をやや北方に向け、土坑が設けられ、その中にこの甕が、口を、上方にして埋められていた。

この周囲には、副葬品と思われるような中世

の遺物は全く出土せず、ただこの甕1基のみが単独で出土したわけである。

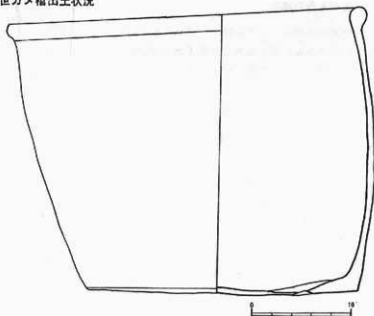
甕の内部には、焼骨と思われる骨片が数片在存していたのみで、やはり副葬品は見ることができなかった。

甕の状態は、形がかなりいびつであり、外面は、淡灰色を呈し、内面は濃灰色を呈している。

また、底部は平底であるが、不安定であり、口用品として使用し難いことがうかがわれる。なお、底部には、1ヶ所穿孔孔がある。



第16図 立石貝塚中世カメ棺出土状況



第17図 カメ棺実測図

V 埋

葬

立石貝塚の発掘はA・B両地点で行なわれたが、人骨は貝塚のあるA地点に埋葬されていた。

人骨は8個体発見された。下表のごとく第6号人骨はカメ棺に埋葬された中世の人骨であったが、他の7個体は縄文人骨らしい。

7個体の縄文人骨のうち、第1・3・7号それに8号人骨はほぼ完全な状態で発掘できた。ところが他の人骨(第2・4・6号人骨)は第Ⅲ層の中から骨片だけが発見された。おそらく第2・4・6号人骨は前記4体の一部かと思われる。

第7表 人骨一覧

人骨番号	性別	年齢	頭位	葬位	時代	備考
1	男性	熟年	北頭位	仰臥屈葬	縄文後期	骨片
2	不明	不明	不明	不明	中世	カメ棺
3	女性	熟年	北頭位	右側臥屈葬	縄文後期	骨片
4	女性	不明	不明	不明	中世	カメ棺
5	不明	不明	不明	不明	中世	カメ棺
6	不明	小児	不明	不明	中世	カメ棺
7	女性	熟年	北頭位	仰臥屈葬	縄文後期	胎児あり
8	女性	壮年	北頭位	仰臥屈葬	縄文後期	胎児あり

立石人骨の編年

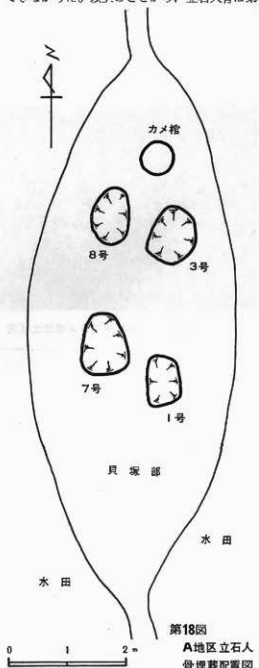
A地区の地層については前章で述べられているとおりである。第Ⅰ層および第Ⅱ層の礫泥りのカク乱層に続いて第Ⅲ層は混貝礫層であった。混貝礫層の下は第Ⅳ層の赤褐色粘質土層であった。前章の報告によれば、第Ⅲ層は縄文後期であり、第Ⅳ層は無遺物層とのことである。

立石人骨(1・3・7・8号人骨)は、第Ⅲ層(混貝礫層)の下部を発掘して発見された。土壌は第Ⅳ層に掘り込まれていた。

人骨の時代決定にあたって土壌の上縁(掘り込みの面)がどの層にあったかということは重要である。もし、立石人骨が縄文後期(第Ⅲ層)よりも新しい時期の人骨であるならば、第Ⅰ層あるいは第Ⅱ層に掘り込み面があって第Ⅲ層を切って埋葬されていなければならない。

ところが、人骨の上部は第Ⅲ層の貝層が載っており、第Ⅰ層あるいは第Ⅱ層からの落ち込み

はみられなかった。従って土壌の上縁は第Ⅲ層にあったものと思われる。ただ混土貝層という特殊な地層のため土壌の縁を見いだすことはできなかった。以上のことから、立石人骨は第

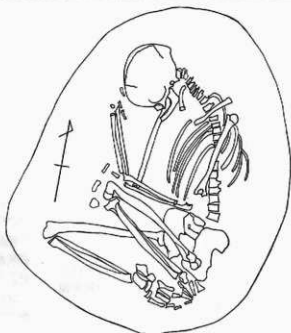


第18図

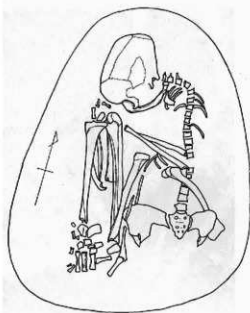
A地区立石人骨埋葬配置図



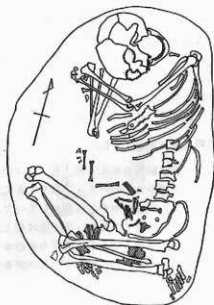
1号人骨



3号人骨



7号人骨



8号人骨

第19图 立石人骨出土状况实测图 ($\frac{1}{10}$)

Ⅲ層の時代に相当する。前章の考古学部門の報告によれば、第Ⅲ層は縄文後期とのことである。当然立石人骨もまた縄文後期ということになる。

なお、立石人骨には副葬品がみられなかったので、副葬品から人骨の編年を推定することはできなかった。

立石人骨の埋葬姿勢（第1—4図）

第1号人骨（第2・3図）

北頭位で仰臥屈葬の熟年男性人骨。

ほぼ楕円形な土竈内に頭部を北に向け、上・下肢をともに強く屈していた。

下顎は左・右の鎖骨付近にあったが、頭骨は埋葬後動いたらしく底部を上に向けていた。上肢は肘関節を強く屈し、左・右の手を下顎付近にあてていた。下肢は股関節および膝関節を強く屈し腹部につけていた。

第3号人骨（第2・3図）

北頭位、やや仰臥に近い右側臥屈葬の壮年女性人骨。

ほぼ楕円形な土竈内に頭部を北に向け、上・下肢をともに強く屈していた。

頭蓋骨は右側頭部を下にしていた。左手は右肘関節付近にあて、右手は頭蓋の下にあてていた。下肢の場合は、股関節および膝関節を強く屈折して腹部につけるようにしていた。

第7号人骨（第2・4図）

北頭位で仰臥屈葬の熟年女性人骨。ほぼ楕円形な土竈内に頭を北に向け上・下肢をともに強く屈していた。頭蓋はやや右に傾斜していた。右上肢は後方へ屈していたが、左上肢は右上方に屈し、右側頭部付近で右手と左手を合わせていた。下肢の場合は、股関節および膝関節を強く屈し腹部につけていた。

第8号人骨（第1・2・4図）

北頭位で仰臥屈葬位の壮年女性人骨。

ほぼ楕円形な土竈内に頭部を北に向け、やや右側臥屈葬に近い仰臥屈葬であった。右上肢は後方へ屈していたが、左上肢は肘関節を軽く屈

して右上肢の上においていた。下肢と腹部の間に大きな空間がみられた。おそらく妊娠した状態で埋葬したため、他の人骨のように下肢を強く屈することができなかったものと思われる。8号人骨には胎児骨を伴っていた。胎児骨は一部腹腔部付近にあったが、大部分の骨は骨盤腔内で発見された。

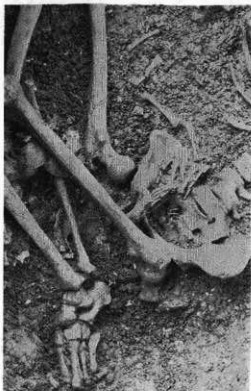
8号人骨は妊娠したまま死亡したものと思われる。

以上、立石貝塚の発掘において4体の成人骨を得ることができた。

立石の成人骨は男性1体と女性3体であった。

埋葬姿勢は右側臥屈葬が1体で、他の3体は仰臥屈葬であった。いずれも頭を北に向けていた。

立石の成人骨は第Ⅲ層中に埋葬されていた。考古学的に第Ⅲ層は縄文後期に編年できるとのことであるので、人骨もまた縄文後期に編年されそうである。



第20図 胎児骨の出土状況

VI 人 骨

立石貝塚から見いだされた人骨は8体に及んでいるが、これらのうち成人骨4体(1号, 3号, 7号, 8号)は保存状態も良く、骨格の大部分が残っていた。しかしながら他の2号, 4号および5号人骨は頭蓋冠あるいは四肢骨の断片数点ずつで、精査の結果上記4体の一部である可能性が高い。また6号人骨は小児骨でカメ棺内から得られたものである。

すでに述べられているように、貝塚は中津式その他の土器を包含し、縄文時代後期初頭に営まれたものとされているが、成人骨4体はいずれも土坑内で仰臥屈葬位をとっていた。小児骨の場合はやや趣を異にし、埋葬に用いられてい

たカメ棺も中世のものである。なお成人骨4体は男性1体、女性3体であるが、人骨資料の一覧は第8表に示すとおりである。

第8表 人 骨 資 料

No.	性 別	年 令	備 考
1	男	性 熱	骨片 頭蓋骨片 四肢骨片 カメ棺(中世)
2	女	明	
3	女	不	
4	女	明	
5	女	不	
6	不	明	(6~7才) 年 令
7	女	性 熱	
8	女	性 壯	(胎児骨)

所 見

A. 頭 蓋 骨

第9表 頭 蓋 骨 の 計 測 値

Martin No.	項 目	性 別			
		男 性	女 性		
		1 号	3 号	7 号	8 号
1	頭 骨 最 大 長	184	192	193	185
8	頭 骨 最 大 幅	137	136	136	137
17	バジオン・ブレグマ高	141	139		133
8/1	頭 骨 長 幅 示 数	74.46	70.83	70.47	74.05
17/1	頭 骨 長 高 示 数	76.63	72.40		71.89
17/8	頭 骨 幅 高 示 数	102.92	102.21		97.08
23	頭 骨 水 平 間	515	535	530	515
24	横 弧 長	320	312	301	300
25	正 中 矢 状 弧 長	371	378	390	376
1+8+17(13)	脳 頭 骨 モ ズ ル	154.00	155.67		151.67
38	脳 頭 蓋 容 量	1470	1382		1338
44	両 眼 窩 幅	92	98.6	99	95
45	頬 骨 弓 幅	(135)	(130)	(127)	124
46	中 顔 幅		96	98	93
47	上 顔 高				112
48	上 顔 高			65	62
47/45	顔 示 数 (K.)				90.32
47/46	顔 示 数 (V.)				120.43
48/45	上 顔 示 数 (K.)			(51.18)	50.00
48/46	上 顔 示 数 (V.)			66.33	66.67
50	前 眼 窩 間 幅	21	21		17
50/44	前 眼 窩 間 示 数	22.83	21.30		17.89

51	眼	高	幅	(左)	39	43	40
52	眼	窩	高	(左)	32	36	33
52/51	眼	窩	示	数 (左)	82.05	83.72	82.50
54	鼻			幅		25	22
55	鼻			高		50	44
54/55	鼻		示	数		50.00	50.00
72	全	側	面	角		81	82
73	鼻	側	面	角		86	91
74	齒	槽	側	面		62	58

頭蓋骨の主な計測値は第9表に示すとおりである。

a. 脳頭蓋

(1) 頭蓋の3主径

立石人骨の男性(1号)では、頭骨最大長が184mm, 最大幅が137mm, バジオン・プレグマ高が141mmで、これら3径から導かれる示数値は頭骨長幅示数が74.46, 長高示数が76.63, 幅高示数が102.92となり、頭型としてはdolicho-, hypsio-, acrocranに属し、長頭かつ高頭の傾向が見られる。

女性では頭蓋諸径が著しく大きく、とくに3号、7号の2例は男性例を凌駕している。頭骨最大長では3号が192mm, 7号が193mm, 最大幅では3号、4号共に136mmで、頭骨長幅示数はそれぞれ70.83, 70.47となり強い長頭性が認められる。また8号でも頭骨最大長が185mm, 最大幅が137mmで、頭骨長幅示数は74.05である。バジオン・プレグマ高では3号が139mm, 8号が133mmで、頭骨長高示数は72.40, 71.89, また幅高示数は102.21, 97.08となっている。すなわち頭型としては両例共にdolicho-, ortho-, acrocran, 7号がdolichocranに属し男性の場合と同じように強い長頭性と共に高頭の傾向が見られる。

(2) 周径および弧長

男性(1号)では、頭骨水平周が515mm, 横弧長が320mm, 正中矢状弧長が371mmである。

女性例では、頭骨水平周が535~515mm, 横弧長が312~300mm, 正中矢状弧長が390~376mmとなっており、上記の頭蓋3主径の値とよく符合している。

(3) 頭骨モズルスおよび容量

脳頭蓋の全体的な大きさを知るために、頭骨モズルス(頭骨最大長+頭骨最大幅+バジオン・プレグマ高/3)およびLEE-PEARSONの方法により脳頭蓋容量を算出してみた。

男性(1号)では、頭骨モズルスが154.00mm, 脳頭蓋容量が1470ccである。

女性例のうち3径が計測できた3号、8号ではそれぞれ頭骨モズルスが155.67mm, 151.67mm, 脳頭蓋容量が1382cc, 1338ccである。

b. 顔面頭蓋

顔面部全体の形態については、男性、女性例共に著しい低・広顔の傾向はなく、頬骨弓の強い張り出しも見られない。眉上弓は女性では勿論、男性においても隆起は弱い。また眉間の膨隆はほとんどなく、鼻根部の陥凹もきわめて弱い。すなわち眉間から鼻根部にかけては扁平な感じである。次いで鼻骨の幅も狭く、彎曲も弱い。また前頭突起もとくに前後の方向に立っているような傾向は見られない。眼窩および鼻の形態についても高径に比して幅径が小さい。

また歯に関しては、8号を除く他の3例では生前における脱落がひどい。上顎骨歯槽部の観察できる7号、8号の両例では上顎の傾向が強く反った歯であったと思われる。

(1) 顔面頭蓋の主径

男性例では高径、幅径等の計測はできないが頬骨弓幅の推定値は135mmで大きいものではない。

女性では、7号の頬骨弓幅推定値127mm, 中顔幅98mm, 上顔幅65mmで、上顎示数を求めるとKollmannの示数は51.18でmesenに属し、Virchowの示数は66.33であり、顔面部のよく保存されている8号については頬骨弓幅124mm,

中顔幅 93mm, 顔高 112mm, 上顔高 62mm で、これらから導かれる示数値は顔示数が 90.32 (K.), 120.43 (V.), 上顔示数が 50.00 (K.), 66.67 (V.) である。すなわち顔型あるいは上顔型としては leptoprosop, mesen に属していることになる。

(2) 眼窩および鼻

男性例では計測できないので、女性例について述べると、眼窩幅では 43mm~39mm, 眼窩高では 36mm~32mm で、眼窩示数は 3 号が 82.05, 7 号が 83.72, 8 号が 82.50 となり、女性の 3 例はいずれも mesoconch に属している。

鼻では 7 号, 8 号それぞれ鼻幅が 25mm, 22mm 鼻高が 50mm, 44mm で、鼻示数は両例共に 50.00 となり、いずれも mesorrhin に属している。

(3) 顔面角

計測できた例は女性骨の 7 号および 8 号であるが、全側面角では 81 度, 82 度, 鼻側面角では 86 度, 91 度であり、いずれも meso-, orthognath に属しているが、歯槽側面角ではそれぞれ 62 度, 58 度で小さく, ultra-ないし hyperprognath に属し、強い突顎性を現わしている。

第10表 鼻根部の計測値

	男 性		女 性	
	1 号	3 号	8 号	
前 眼 窩 間 幅	21.0	21.0	17.0	
鼻 根 横 弧 長	23.0	22.0	19.0	
鼻 根 彎 曲 示 数	91.30	95.45	89.47	
鼻 骨 最 小 幅	8.0	7.0	7.6	
前頭突起上幅 (左)	8.0	10.0	7.7	
前頭突起水平傾斜角		125.0	120.0	

(4) 鼻 根 部

鈴木の方法にならない、鼻根部の計測を試みたので、その成績について述べる。なお計測値は第10表に示すとおりである。

男性例 (1 号) では、前眼窩間幅が 21.0mm, 鼻根横弧長が 23.0mm で、鼻根彎曲示数は 91.30 となる。前頭突起上幅は 8.0mm で狭く、鼻骨最小幅も 8.0mm である。

女性では、3 号および 8 号が計測できたが、両例はそれぞれ前眼窩間幅が 21.0mm, 17.0mm, 鼻骨横弧長が 22.0mm, 19.6mm, 鼻根彎曲示数が 95.45, 89.47 である。前頭突起上幅は 10.0mm, 7.7mm, 鼻骨最小幅は 7.0mm, 7.6mm であり、また前頭突起水平傾斜角は 125 度, 120 度と著しく大きい。すでに述べたように観察上鼻根部が平坦で鼻骨の隆起がきわめて弱いが、計測結果もまたそれとよく符合するものであった。

c. 歯 牙

男性例 (1 号) および女性の 2 例 (3 号, 7 号) では観察できる大部分の歯槽は閉鎖し、かつ骨の萎縮が見られ、生前すでに脱落していたものである。しかし抜歯を思わせる明らかな例は見いだし得ない。

女性の 8 号のみは歯がよく残っており、咬合型は鉗状咬合で、咬耗度は 1 度、また上顎左側の P₂, 下顎右側の M₁, 左側 M₃ に馬歯が認められた。なお各例の歯式は次のとおりである。

- 歯槽開放 (死後脱落)
- × 歯槽閉鎖 (生前脱落)
- / 不 明 (骨 破 損)
- ・ 馬 歯

/ / / / / / / /	/ / / / / / / /	
× × × × × × ○ ×	× ○ × × × × × ×	1 号
/ / / / / / / /	/ / / / / / / /	
/ / / / / ○ ○ ×	× × × × × × × ×	3 号
× × / / / / / /	× ○ ○ × × × × ×	
× × × × × × × ×	× × × × × × × ×	7 号
○ M ₂ M ₁ P ₂ P ₁ C I ₂ I ₁	I ₁ I ₂ C P ₁ P ₂ ○ M ₃ ○	
M ₃ M ₂ M ₁ P ₂ P ₁ C I ₂ I ₁	○ I ₂ C P ₁ P ₂ M ₁ M ₂ M ₃	8 号

B. 四肢骨

a 上腕骨

第11表 上腕骨の計測値

Martin No.	項 目	1号(男性)		3号(女性)		7号(女性)		8号(女性)	
		右	左	右	左	右	左	右	左
1	最 大 長	282	279		270			241	236
5	中 央 最 大 徑	21	22		20			18	20
6	中 央 最 小 徑	15	15		14			12	12
6/5	骨 体 断 面 示 数	71.43	68.18		70.00			66.67	60.00
7	骨 体 最 小 周	58	60		53			51	53
7/1	長 厚 示 数	20.57	21.51		19.63			21.16	22.46

上腕骨の主なる計測値は第11表に示すとおりである。

一般に上腕骨は余り大きくないが、とくに長さの割りに細く、三角筋粗面の発育も悪く、腕骨神経溝も浅い。扁平性は女性8号においてやや著明である。

(1) 長径および周径

男性例(1号)では、最大長が282mm(r), 279mm(l), 最小周が58mm(r), 60mm(l)で、長厚示数は20.57(r), 21.51(l)となっている。女性例では、最大長は3号が270mm

(l)でやや大きく、8号は241mm(r), 236mm(l)で著しく小さい。最小周は3号が53mm(l), 8号が51mm(r), 53mm(l)で、したがって長厚示数は前者が19.63(l), 後者が21.16(r), 22.46(l)となっている。

(2) 骨体断面

男性(1号)では骨体断面示数が71.43(r), 68.18(l), 女性では、3号が70.00(l), 8号が66.67(r), 60.00(l), となり、8号の場合は多少強い扁平性が認められる。

b. 大腿骨

第12表 大腿骨の計測値

Martin No.	項 目	1号(男性)		3号(女性)		7号(女性)		8号(女性)	
		右	左	右	左	右	左	右	左
1	最 大 長	408		368	367	361	360	347	347
2	全 長	407		367	366	359	356	344	344
6	骨体中央矢状径	29		21	22	24	24	20	20
7	骨体中央横径	29		26	26	26	26	23	23
6/7	中央骨体断面示数	100.00		80.77	84.62	92.31	92.31	86.96	86.96
8	骨 体 中 央 周	90		74	75	77	77	68	68
8/2	長 厚 示 数	22.11		20.16	20.49	21.45	21.63	19.77	19.77
9	骨 体 上 横 径	32	32	29	29	28.5	29	27	27
10	骨 体 上 矢 状 径	26	23	20	21	20	20	18	18
10/9	上骨体断面示数	81.25	71.88	68.97	72.41	70.18	68.97	66.67	66.67

大腿骨の主なる計測値は第12表に示すとおりである。

一般に大腿骨は男性例ではやや大きく、女性例では小さいが、両者共に殿筋粗面等の発育は不良で、とくに骨体が丸いことが目立ち、女性

例の場合は矢状径よりも横径の方が大きく、勿論柱状形成などは見られない。上骨体部の扁平性については男性例では弱く、女性の場合、扁平の傾向が認められる。

(1) 長径および周径

男性例(1号)では、最大長が408mm(r), 全長が407mm(r), 骨体中央周が90mm(r)で、長厚示数は22.11(r)となっている。女性例では、長さの割りに細く、長厚示数は3号が20.16(r), 20.49(l), 7号が21.45(l), 21.63(l), 8号が両側共に19.77となっている。

(2) 骨体断面

男性(1号)では、骨体中央矢状径、横径共に29mmで、中央骨体断面示数は100.00となる。女性例では、3例共に骨体中央矢状径は横径

よりも小さく、中央骨体断面示数は3号が80.77(r), 84.62(l), 7号が左右共に92.31また8号が両側共に86.96となり、柱状形成などの傾向は全くなかえない。

(3) 上骨体断面

男性例(1号)では、上骨体断面示数は81.25(r), 71.88(l)となり、扁平性は見られないが、女性例では、3号が68.97(r), 72.41(l), 7号が70.18(r), 68.97(l), 8号が左右共に66.67となり、男性の場合よりも扁平な値を示している。

c. 胫 骨

第13表 胫 骨 の 計 測 値

Martin No.	項 目	1 号 (男性)		3 号 (女性)		7 号 (女性)		8 号 (女性)	
		右	左	右	左	右	左	右	左
1	全 長		(320)	285	285	295	273	273	
1a	最 大 長			288	288	(297)	296	275	273
8	中 央 最 大 径		(30)	25	25	(26)	25	24	23
9	中 央 横 径		(22)	18	18	(18)	(20)	18	18
9/8	中 央 断 面 示 数		(73.33)	72.00	72.00	(69.23)	80.00	75.00	78.26
10b	骨 体 最 小 周		75	63	63	65	66	60	60
10b/1	長 厚 示 数			22.11	22.11		22.37	21.98	21.98

胫骨の主なる計測値は第13表に示すとおりである。

一般に胫骨は余り大きくないが、その割には太い。胫骨粗面、後面のヒラメ筋線などの発達に著明でなく、骨体の扁平性も認め得ない。

(1) 長径および周径

男性例(1号)では推定最大長が320mm, また骨体最小周が75mmで比較的大きい。

女性では左側の場合、最大長が296mm~273mm全長が295mm~273mm, 骨体最小周が66mm~60mmで、長厚示数は3号が22.11, 7号が22.37, 8号が21.98となっている。

(2) 骨体断面

男性例(1号)ではほぼ中央と推定される部位で最大径が30mm, 横径が22mmで、これから示数値を求めると、73.33となる。女性では、左側の場合、中央断面示数は3号が72.00, 7号が80.00, 8号が78.26となり扁平性は認め得

ない。

C. 身長推定値

右側大腿骨の最大長を用いて、PEARSONの方法により身長推定値を求めると、男性(1号)では158.01cm, 女性では3号が144.42cm, 7号が143.06cm, 8号が140.34cmで、女性3例の平均は142.61cmであり、女性の低身が目だっている。

D. 胎児骨

8号人骨(女性, 壮年)の骨盤腔およびその直下部より胎児骨1体分が見いだされた。出土状態より見て、胎内にあったものと断じて差支えないと思われる。

いま、残っていた胎児骨のうち右側の上腕骨、大腿骨、胫骨の最大長を計測し、堀吉(1973)の現代人における胎児胎児骨の最大長と対比すれば第14表に示すとおりである。

第14表 胎児骨の計測値

	胎児骨 (身長推定値)	現代胎児	
		9ヶ月	10ヶ月
大 腿 骨	68.4 (482)	63.20	71.85
脛 骨	60.5 (483)	56.00	62.76
上 腕 骨	56.0 (451)	55.60	61.25

すなわち8号人骨より得られた胎児骨は、現代人胎児の9カ月と10カ月の場合の中間値を占めており、当時としてはおそらく妊娠最終末で分娩直前の頃ではなかったかと推定される。

また、龍吉(1973)の式にもとづいて胎児の身長値を推定すると、大腿骨より482mm、脛骨より483mm、上腕骨より451mmと算出される。

E. カメ棺内の小児骨

カメ棺内から得られた人骨は、頭蓋冠および四肢骨の小破片のみで、幼小児骨であろうということは考えられるが、はっきりしない。ところが歯が見いだされ、そのうち第1大臼歯4本が確認できた。歯冠表面の状態から見て、萌出を終えた頃の時期と考えられるので、6才ないし7才と推定してよいであろう。

総 括

1. 立石貝塚より出土した人骨の脳頭蓋は長頭型でかつ高頭の傾向が強く現われている。

2. 顔面頭蓋に関しては、眉間から眉上弓にかけての隆起が男性骨においても著明でなく、鼻根部の陥凹もきわめて弱い。鼻骨も狭くて隆起も著しく低い。

顔面部の諸径については狹顔型の下限から中顔型に位するものようで、少なくとも著しい低・広顔の傾向は現われていない。また眼窩や鼻についても顔面部の形態に相応して比較的高い。

3. 顔面角のうち歯槽側面角が小さく、突頤の傾向が強く、おそらく反っ歯であったろう。

4. 歯は生前の脱落がひどく、歯槽は完全に閉鎖、骨萎縮が見られるものが多い。壮年女性骨1例においてのみ歯がよく残っていたが、この例でも歯槽が認められた。咬合型は缺状咬合で、風習的抜歯を思わせる例は見いだせなかつた。

た。

5. 四肢骨では、上肢骨は比較的細く、下肢骨はやや頑丈であるが、扁平性あるいは柱状形成の明らかな例は確認できなかった。

6. 身長推定値は、男性が158.01cm、女性では144.42cm、143.06cm、140.34cmで、女性3例の平均は142.61cmであった。

7. 8号人骨(女性、壮年)の骨盤中より見いだされた胎児骨は妊娠末期のもので、おそらく分娩直前の母児であったと推測される。

8. カメ棺内に埋葬されていた人骨は6~7才の小児骨と推定される。

立石人骨の形質は以上述べたとおりであるが、これは津雲、吉胡をはじめ従来出土している縄文人骨の形質と異なっている。ちなみに両者の特徴を列記すれば次のようになる。

	立石人骨	縄文人骨
頭 型	長頭、高頭	中頭、低頭
顔 型	中顔	短・広顔
眉間、眉上弓	隆起きわめて弱	強く隆起
鼻 根	扁平	強く陥凹
鼻	狭、低	広、隆起
突顎性	+	(反っ歯)
歯	缺状咬合 生前脱落多し 歯槽あり	鉤子状咬合 歯列整然 歯槽少し
四肢骨		
扁平性	-	+
柱状形成	-	+

これらのうち脳頭蓋をとりあげてみると、縄文人骨は、大頭で短頭に近い中頭型に属し、高径が低いといわれている。しかしながら、すでに報告されている縄文人骨を個別に見ると長頭型の例は見られるし、九州から出土している資料^{14) 15) 16)}の中にも金関等(1955)の御嶺人骨¹⁶⁾の男性は3例共に強い長頭性を現わしているが、立石人骨の場合は長頭性のみでなく、顔面頭蓋あるいは四肢骨等全項目にわたって異なる形質を示しているのである。

元来、縄文人骨の形質は時期的あるいは地方的に差が少ないといわれているが、ある程度の地方差は勿論存在するであろう。現在九州地方

からの縄文人骨は資料が少ないが、将来各地からの人骨資料が出そろえば、あるいは立石人骨も縄文人骨の一地方型と解釈できるときはくるかも知れない。しかしながら現時点においては立石人骨を縄文人骨を断ずるのには無理があり、その特徴を日本人形質の時代的变化の中に求むるならば中世人骨に最も類似しているもの^{2,3,4,5,6,7,17,18}のようである。

いうまでもなく出土人骨の時代決定に関しては層位の観察による考古学的方法が優先すべきであり、また本調査はきわめて精巧に行なわれ

たものであるが、同時にわれわれは、観察し得ることの限界についても謙虚でなければならぬ。考古学と人類学との共同研究において、その役割りを果たす上からも本人骨の時代観に疑問を提示し、将来の課題としておきたい。

(欄外するに当たり本調査に参加の機会を与えていただいた賀川光夫教授ならびに大分県教育委員会ご当局に対して感謝の意を表します。)

文 献

1) Martin-Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie Bd.I. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart.

2) 鈴木 尚, 1954: 石器時代より現代に至る鼻根部形態の時間的推移について。日本人類学会・日本民族学協会第7回連合大会記事。

3) 鈴木 尚, 1953: 石器時代より昭和時代に至る日本人頭型の時間的推移について。解剖誌, 28(総会号)。

4) 鈴木 尚, 1967: 日本人形質の時代的变化。解剖誌, 42(1)第72回総会号。

5) Suzuki, H., 1969: Microevolutional changes in the Japanese population from the Prehistoric age to the Present-day. J. Fac. Sci., Univ. Tokyo, Section V.

6) 鈴木 尚, 1963: 日本人の骨。岩波書店, 東京。

7) 磯吉敏男, 1973: 胎児の顔面骨について。解剖誌, 48(3)。

8) 清野謙次・宮本博人, 1925: 津雲貝塚人骨の人類学的研究, 第2部頭蓋骨の研究。人類学雑誌41(3, 4)。

9) 清野謙次・平井隆, 1928: 津雲貝塚人骨の人類学的研究, 第3部上肢骨の研究。人類学雑誌43(3附録)

10) 清野謙次・平井隆, 1928: 津雲貝塚人骨の人類学的研究, 第4部下肢骨の研究。人類学雑誌, 43(4附録)。

11) 金高勘次, 1928: 吉胡貝塚人骨の人類学的研究, 第1部頭蓋骨の研究。人類学雑誌, 43(6附録)

12) 大場秀夫, 1935: 吉胡貝塚人骨の人類学的研究, 第4部上肢骨の研究, 人類学雑誌50(9附録)

13) 石沢倫達, 1931: 吉胡貝塚人骨の人類学的研究, 第3部下肢骨の研究。人類学雑誌46(1附録)

14) 金岡丈夫・原田忠昭・浅川清隆, 1955: 熊本県下益城郡豊田村御領貝塚発掘の人骨について。人類学研究, 2。

15) 大森茂吉, 1960: 故南山大学教授中山英司博士により測定された阿高貝塚人骨の測定値。人類学研究, 7。

16) 大森茂吉, 1960: 薩摩国出水貝塚出土(昭和29年)の人骨について。鹿児島県会誌, 33。

17) 鈴木 尚, 1956: 鎌倉村木座発見の中世遺跡とその人骨(Ⅱ, Ⅲ)。東京。

18) 内藤芳篤, 1973: 尾雁(人骨)。熊本県文化財調査報告, 12。

(I)

立石貝塚は国東半島の突出によって瀬戸内海を仕切り、周防灘に面した丘陵地間の扇状地にある。豊前海岸と国東半島の基部は、東木竜七氏が旧森湾（1927、東木）と名付け、その懷に多数の遺跡が存在する。この一帯は宇佐御許山付近より發した寄藤川が雲ヶ嶽に源をもつ向野川と合し水勢を増し、河口付近で桂川と合して周防灘に注ぐ。この寄藤、桂川の両川を合した一帯の沖積原は、更に進行して広大な干潟を形成する。現在この沖積原の形成過程にある干潟はおびただしい貝類の生棲地で、春には潮干狩りの人達で賑わいをみせる。現在の沖積原は、寄藤川と桂川の両河川に沿って開け、それぞれ山麓に発達した山麓階や、その間に発達した顕著な扇状地、河川による自然堤防などに貝塚をとまう先史時代の集落をみる。こうした山麓階前面の森貝塚や米縄貝塚、立石貝塚などは、ほぼ海拔10~20mの位置に存在し、おおむね10m以下の沖積平野と接している。かりに山麓階（Piedmont bench land）の前面やその間の扇状地（Alluvial fan）の前面に貝塚が存在するとすれば、それは沖積原の先端であって、東木竜七氏の旧森湾はこれら貝塚の前面をさすものと考えてよい。

旧森湾のもっとも深奥に位置する貝塚は、河口より約4kmの森貝塚（田築川—杵川上流）と立石貝塚（田築川—寄藤川に合流）の二つで、前者は樋口清之（1931、樋口）により調査が実施されたことにより学史的にも著名な遺跡となった。

さて樋口清之氏の報告や、その後鶴山猛、入江英親両氏の調査などにみる森貝塚の実態は、調査面積の関係もあって、主として出土遺物に限られ、それが縄文後期磨消縄文の系列という問題にとどめられている。鐘ヶ崎式という名称で統一されている土器形式は、きわめて特徴のある磨消縄文で、口縁部に橋状把手をもち、入

組文（凹線文）を主体とした磨消縄文で、北部九州（1927、田中）から九州中央の西側では御手洗B式（1939、小林）、東側の小池原式（1964、賀川）など若干の形式や施文の差はあっても類似形態として基本的関連をもち、豊後水道を東に越えて四国西岸平城貝塚（1957、鎌木、西田）にそれぞれ鐘ヶ崎タイプの単純様式として注目されてきた。勿論、北部九州から東への影響も顕著で、山口県岩田遺跡（1969、松崎寿和・関根忠彦）においても瀬戸内における津雲A式・彦崎KⅠ式とその併行形式として東への影響を述べている。したがってこの鐘ヶ崎と汎称された土器形式、各地で形式分類され若干の違いがあるにかかわらず、それぞれの形式名を冠している。この混乱をさけるために、この名称を「磨消縄文Ⅱ式土器」（1970、賀川）と呼ぶことにした。

さて立石貝塚においては、九州北半全域にわたり、また一部が顕著に東への影響をみる磨消縄文Ⅱ式（鐘ヶ崎）の系統とは別に、瀬戸内一帯に分布する中津式から福田KⅠ式（1965、鎌木・高橋）にみる沈線で曲線文をえがくことを基本とする磨消縄文が多くみられる。また三本の沈線をひいてその内だけに縄文を残す手法など注目される。これらは瀬戸内一帯で津雲Aから彦崎KⅠにみられるいわゆる縁帯文の盛行する磨消縄文との差を考えると、立石貝塚の位置が明確になる。かつて中津市植野貝塚（1957、賀川）の発掘において、一部に福田KⅠ式に併行するとみられた土器の出現は、その後北部九州における永犬丸貝塚（1972、中村）、山鹿貝塚（1972、永井他）において東からの影響が顕著となり、ここに磨消縄文Ⅱ式（鐘ヶ崎）との層位の問題の検討をせまられたのである。

瀬戸内一帯における中津、福田KⅠ式の華麗な磨消縄文と津雲A、彦崎KⅠの縁帯文への傾向は、そのまま、山鹿貝塚（永犬丸貝塚）から鐘ヶ崎への変化で、旧森湾における立石貝塚から森貝塚への変化とみなすべきである。したが

って、立石貝塚出土の土器をもって東九州的要素の欠除とみるのは当を得たものではなく、周防灘一円における磨消縄文Ⅰ式（中津—福田Ⅰ、山鹿—立石）と、Ⅱ式（鐘ヶ崎、岩田—平城）の系譜の確立をみたというべきで、この点周防灘沿岸様式における縄文後期土器の編年のうえで重要であった。そしてここまでの基礎確立には、長い学究を要し、諸先輩の横上げを賞賛せねばなるまい。

（Ⅱ）

立石貝塚の残された貝層に埋没して発見された人骨は合計8体でうち1体は中世のカメ棺内都より小児骨が発見された。

一応貝層に埋没して発見された縄文時代の7体の人骨のうち1, 3, 7, 8号の4体はそれぞれ不整楕円形の土壌中に安置され、縄文時代各期共通にみられる完全な仰臥屈葬であった。坂田邦洋、岩尾松美の所見によれば、埋葬上位の層はⅢ層で、貝類の堆積された層からの掘り込みの土壌に遺骸は安置されていたと記してある。土壌の切り込みが確実であるとするれば埋葬人骨は縄文後期初頭の遺骸という推理が成立する。

さてこの保存のよい4体の人骨は、埋葬の項で精細な報告があるので省略するが、埋葬に一定の秩序があって注目される。4体共に北頭位で方位が一致し、土壌の大きさや、形態にも特別差別がみられぬ。しかも1号と3号が東西にならび、その南側に7号と8号が併列して、あたかも4遺体を同時に埋葬させた状態である。したがって狭い位置に埋葬された4遺体の土壌はそれぞれ他の墳を構築する際に何の破壊もおこなわれていない。おそらく4遺体の埋葬は、ほぼ同時期と推定される。

立石貝塚の出土人骨の形質にあたった内藤芳篤教授の報告は、形質上立石貝塚人が縄文人との間に著しい相異点がみられるという指摘に注意しないわけにはいかぬ。内藤教授の形質学的所見は、もっとも数多くの縄文人の形質を手掛け、更に優れた見解にもとづくものであることから、立石人の中世の形質は考古学の層位的調

査の絶対性に対する研究方法に再考の余地がないかどうか検討してみる必要がおこった。

層位とは、地質学上土壌の異なる層の堆積序列であって、それぞれの層のうち最も時代的に特徴のある層を鍵層と名付ける。この鍵層はC¹⁴など絶対年代をもって計測される場合があって、一定の年代をもってあらわされる。しかもその鍵となる層を含めて異なる土壌の変化、堆積の間に過去の人間の営みをしめす遺構や、遺物が存在する場合、それが単純にある一定時期をしめすこと、又は二つ以上の異った時代の遺構遺物が存在する場合がある。これを文化層と呼ぶ。前者は一つの時期、後者は遺構、遺物の前後関係、すなわち相対年代をあらわすもので興味がある。

歴史はすべてがそうであるように、ある時間とその時の出来事に集中して、生活、生産活動などの論議がおこなわれる。ある時期の事実を決めるためにはその因果関係は問題になるが、他の時期の事実がはいり込むことはできぬ。考古学の Level つまり水糸は、そうしたある時期を決定する基準なのである。そして「層位」というのは単に異なる土壌の堆積ということではなく、一本の水糸、つまり Level（生活面）を指すのである。

土器の特徴をもって時代の先後関係を決定した先輩の苦勞は単に製作技術や文様の上での特徴ではなく、層位によって決定された。そして今日では土器の微妙な変化はそれぞれ村の領域（テリトリー）を根拠としたものだと解釈されるので、それぞれの交易を考えねばならぬ。したがって厳格な層位的判断にもとづく土器の包蔵は、埋葬の場合には絶対年代を決定することができる。

さて立石人の埋葬の問題にかえろう。内藤教授は、もし将来多数の縄文人の出土をみ、長頭型が地方差としてでてくることがあれば、他の形質上の問題も解決するかも知れぬと称して、熊本県御領貝塚の男性3例をあげている。しかし頭骨以外の形質を含めて立石人が形質上中世人に近似するという意見から、この場合立石貝塚の層位の再考が必要となる。

先ず第1の疑問は、8体の人骨中、貝層に一部埋没して発見されたカメ棺中の中世人骨である。当然貝塚は、今日に至るまでタブーの地として一部が保存されていたことが考えられる。

縄文後期の貝塚に人骨の埋葬が多くみられるのは考古学の常識であるが、この土壌内の縄文人骨には副葬品が存在しておらず、時期の決定は、貝層内にみられる後期土器をあてるという消極的方法になる。更にⅡ層の貝類の被覆下に人骨が安置され、土壌が貝層に埋没していたとする調査所見も、土壌の切目が明確でないので、後世貝塚中に埋葬をおこない貝を被覆する場合もあり得る。更に注目すべきことは埋葬に秩序があって、墓地概念の固着化を思わせる。

以上の数点をあげると、立石人骨は中世人骨となるが、一方、埋葬における屈葬状態、骨の化石化の進行など、従来の縄文人の埋葬と保存に極似し、加えて調査者の慎重な発掘作業による慎重な層位的観察を含めて、縄文時代の埋葬とみることもできる。ここで、人類学の疑問にもとづき、他地域での形質学、層位学の再考をうながし、一つの問題提起としたい。

縄文時代における埋葬と、その時期を決定する問題について、時代を判定する副葬品の出土はその安置された状況の適切な観察と判断において決定される。また前述の層位的精査もこれを決定する重要な要素となるが、貝塚内部に安置され、全体が混土貝層または破砕貝層の場合は、その堆積が一次、二次の判定が困難である。そうしたなかで人類学の形質におけるより高度な数値を重視せねばならぬのではなかろうか。貝塚、砂丘などには多く埋葬人骨がある。これらについての処置は重要である。その一例を挙げて、立石人骨の疑問と、一般の問題提起としよう。

福岡県遠賀川河口近く遠賀郡芦屋町田屋の西南に砂丘があり、この砂丘を馬蹄形に取り巻くのが山鹿貝塚(1972年、永井他)である。この砂丘の中央に田屋部落の聚落があって、この近くから成人二体の胸部骨除去の遺骸が発見された。この人骨は層位的にも、副葬の骨角器も縄文時代の後期に普遍的に存在するものばかり

であった。しかも発掘者の永井昌文氏は、九州大学の解剖学教室教授で、九州各地の古人骨に対する權威ある学者である。ところがその一体の人骨にいわゆる大珠(竪節型大珠)が胸部に安置されていた。この遺物は埋葬人骨を縄文後期に決定する最良の副葬品であった。この大珠について問題が提起されたのである。

梅原末治氏は珠玉の研究においての大先輩であり、氏の考察は尊重せねばならぬ。梅原氏は、山鹿貝塚の人骨胸部に安置された大珠について「福岡県山鹿貝塚出土の竪節型大珠」と題する論文(1969、梅原)によって、この大珠は、禽獣魚型勾玉の性質をもったもので、それは「上古の禽獣魚形勾玉」で、作られた時代を近畿を中心とした古墳期のすでにおこなわれた頃とし、出土状況と合せてその魚形であることの関心を高めた。(1966、梅原)としている。

こうした問題提起は非常に困難な処理を必要とせねばならぬ。縄文人骨埋葬後2次的に胸部骨除去部に魚形大珠を安置したと推理するのは状況に反する。しかし縄文時代の大珠に魚形勾玉に近い類例の検討が必要となることは当然であるが、梅原氏指摘の如くこれが金属器加工とすると、縄文時代珠玉加工の問題に再考が必要となる。歴史はたえずある時期、Levelのうえで問題を処理するという意味で、立石人の疑問を素直に提起したい。

(Ⅱ)

縄文時代の生活で、山内清男氏の「サケ・マス論」(1964、山内)は東北日本の漁撈として、中尾佐助教授の「照葉樹林文化」(1966、中尾)は西南日本の採集技術として注目すべき問題提起であった。この二つの研究は縄文文化における生活技術の基本的問題であるために縄文文化の研究には欠かせないものとなった。

さて本報告では、小池史哲氏によって、貝塚という特殊遺跡の性格を充分に生かした「自然遺物と食料採集」の問題を究明した貴重な研究が加えられた。小池氏の終局的結論は block sampling による採集方法から、自然遺物の分析を可能ならしめたもので、抽出資料としてハ

マガリが多く、全体としては砂泥性貝類が79.37%を占めるとしている。また岩礫性20.26%のうち、砂泥性海岸の小礫や貝殻に付着して生息するものの類として小さなマガキをあげ、当時の海岸景観を内湾干潟にあって小礫の多いことを指示している。この海岸の形成問題は更に森貝塚との対比においてカノコガイや淡水産のカワナなどの多いことから立石貝塚よりも鹹度が低く森貝塚の地盤条件を考えている。こうした貝類の問題から、東木竜七氏の「旧森湾」の景観復原を遂成させ、周防灘沿岸一帯の食物採取の問題を提起した。更に魚類についても分類と生態についてあつかい、捕獲法は遺物の出土を今後待つとして、釣漁法、刺突漁法より網漁法を考えた方がよいとしている。

動物についての食料として、イノシシとニホンジカの遺骸を活用し、その量的に少ないことと、狩猟具の出土が少ないことをあわせて、狩

猟活動に重みをおいた生活ではなく、網漁業、カイ採集に重点がおかれ、漁撈を主体とすることが問題とされた。

小池史哲氏のこうした研究は、本報告の研究品位を高からしめ、縄文文化の研究が、九州においても一歩深められてきたことを示すものとして評価できる。ここに、考古学、人類学、自然科学の三分野を総合する報告書の達成が可能になったことは今後の大きな課題の一つである。

(本報告作成にあたり、調査：執筆まで、問題の提起に学術的研究をもって答えられた人類学の内藤芳篤教授、考古・人類学の坂田邦洋助手、自然科学部門を担当された小池史哲氏に感謝し、またこの報告を学術三分野にわたって総合的研究調査団の編成を心よく受け入れた大分県教育委員会当局に対し、深く敬意を表したい。)

- 1) 1927; 東木竜七 日本内海西城周防灘南部の成因論, 地理学評論 5-1
- 2) 1931; 樋口清之 大分県西国東郡河内村森貝塚の研究, 史前学雑誌 3-1
- 3) 1927; 田中幸夫 北九州の縄文土器, 考古学雑誌 26-7
- 4) 1939; 小林久雄 九州の縄文土器, 人類学先史学講座 11
- 5) 1964; 賀川光夫 所謂鐘崎式土器の層位出土の新例—小池原式の設定—, 大分県地方史 34
- 6) 1957; 鎌木義昌 西田等, 伊予平城貝塚
- 7) 1969; 松崎寿和 関野忠彦, 西日本の後期縄文土器, 新版考古学座談 2
- 8) 1970; 賀川光夫 縄文後期新消縄文Ⅱ式文化—九州の縄文後期の問題, 古代学研究 57
- 9) 1965; 鎌木義昌 高橋源縄文文化の発展と地域性瀬戸内, 日本の考古学 11
- 10) 1957; 賀川光夫 大分県中津市植野貝塚調査報告, 中津市教育委員会
- 11) 1972; 中村修身 永犬丸遺跡, 北九州市文化財調査報告第8集
- 12) 1972; 永井昌文他 山鹿貝塚—福岡県遠賀郡戸畑町山鹿貝塚の調査
- 13) 1969; 梅原米治 福岡県山鹿貝塚出土の鏡形大珠, 九州考古学 36, 37
- 14) 1966; 梅原米治 上古の禽獣魚形勾玉 史林 38-1
- 15) 1964; 山内清男, 日本先史時代概説, 日本原史美術1 講談社
- 16) 1966; 中尾佐助栽培植物と農耕の起源岩波新書

あ と が き

昭和46年夏に実施した宇佐市所在の立石貝塚の緊急発掘調査報告書をここによりやく刊行することができました。

立石貝塚は、九州において最も重要な縄文貝塚の研究地域である周防灘沿岸の貝塚の一つです。ここでも大規模跡場整備事業がおこなわれることになったので、立石貝塚の記録保存のために考古学・人類学の両面からの調査を実施いたしました。

調査の結果は、縄文時代の各種の遺物ならびにこの報告中立石人骨と称された人骨資料について予想以上の成果があがり、今後の研究に大いに寄与するものと確信しております。

なお、調査から執筆にいたるまでひとかたならないご尽力をいただきました、別府大学文学部賀川光夫、長崎大学医学部内藤芳篤両教授をはじめ調査員諸氏、常に協力を惜しまれなかった地元の方々に対して心からお礼を申し上げます。

この報告書を今後の研究・公開などに広く活用して、文化財の保護に一層ご協力くださるよう切望します。

昭和49年3月30日

大分県教育庁文化課長

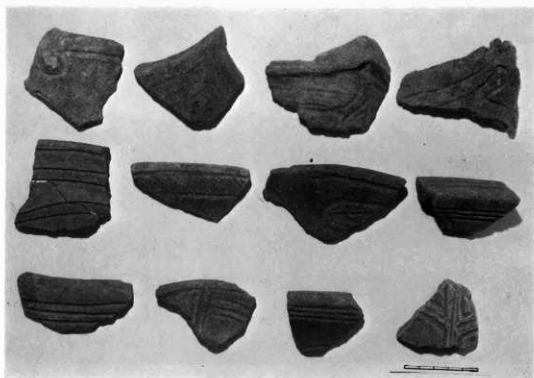
矢 野 朔 雄



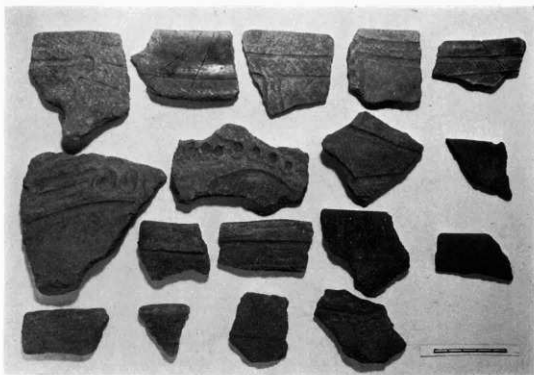
立石貝塚近景



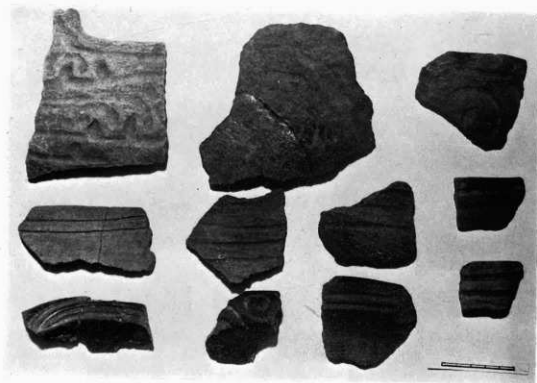
貝塚断面



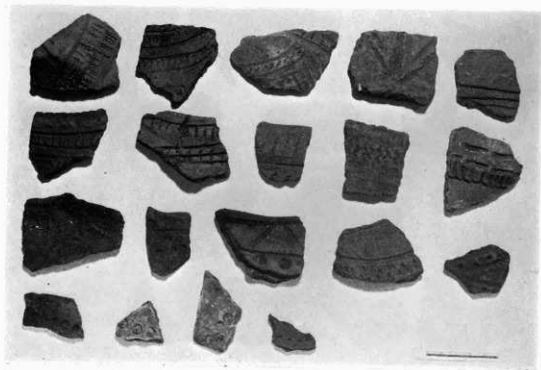
縄文式土器 (第I類)



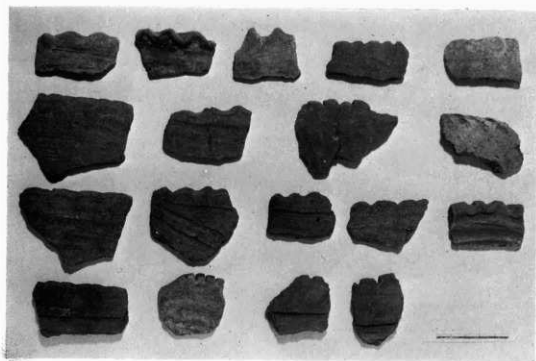
縄文式土器 (第I類)



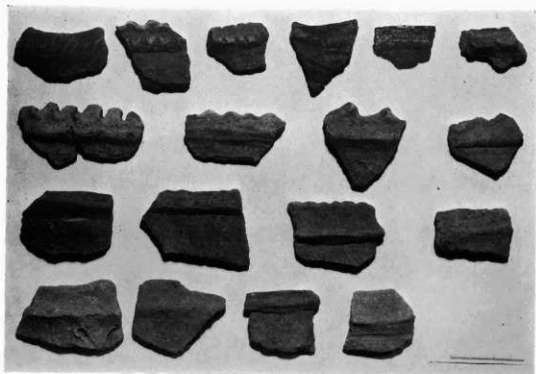
縄文式土器 (第Ⅱ類)



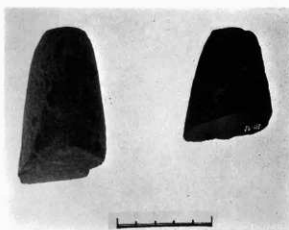
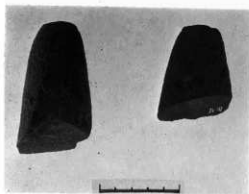
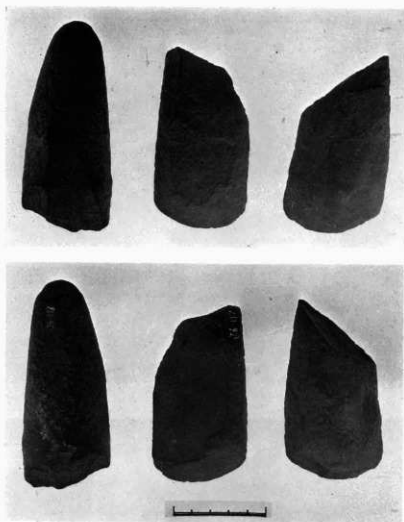
縄文式土器 (第Ⅱ類)

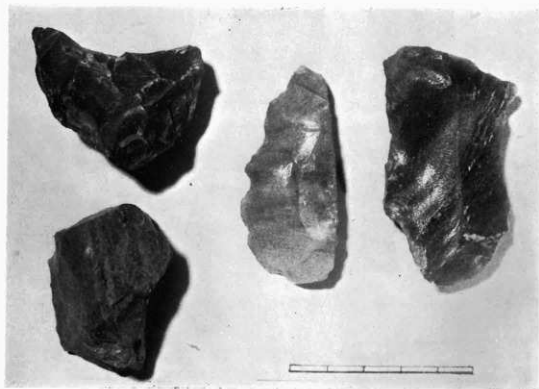
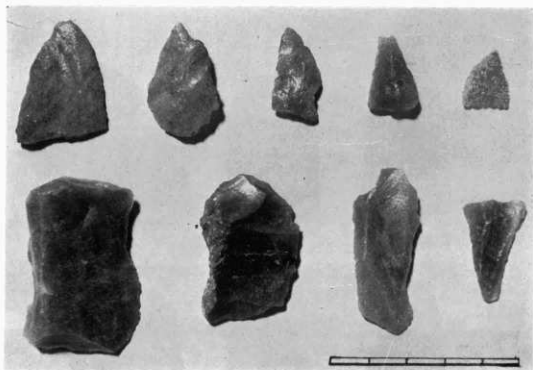


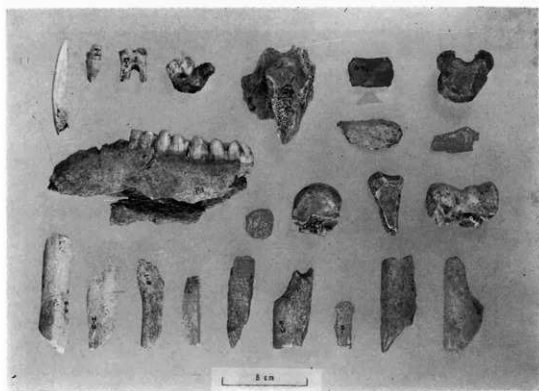
縄文式土器 (第Ⅳ類)



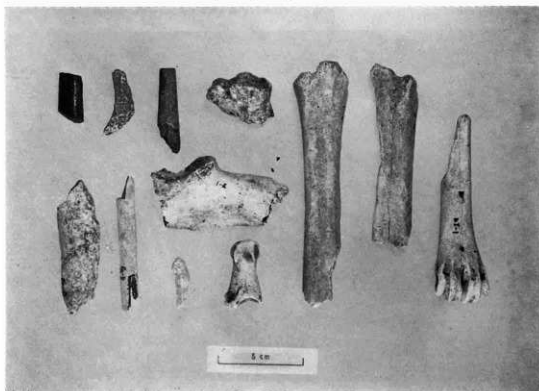
縄文式土器 (第Ⅴ類)







イノシシ



ニホンシカ



第 1 号 人 骨



第 3 号 人 骨

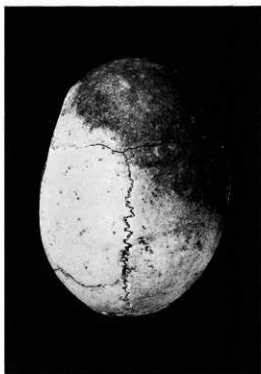


第 7 号 人 骨

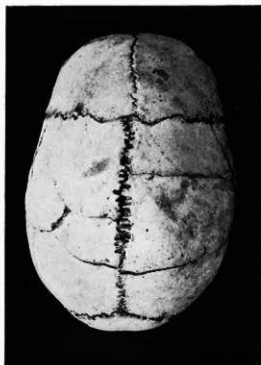


第 8 号 人 骨

1 号 人 骨 (男性, 熟年)



3 号人骨 (女性, 熟年)



7 号 人 骨 (女性, 熟年)



8 号人骨 (女性, 壮年)



1 号 人 骨 (男性, 熟年)

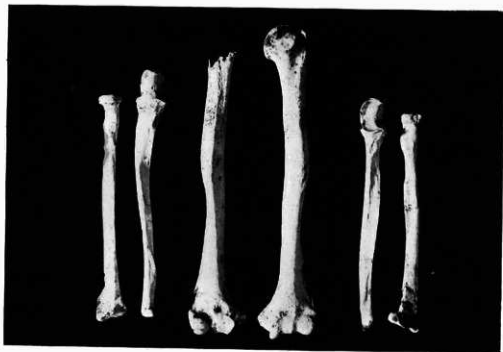


上 肢 骨

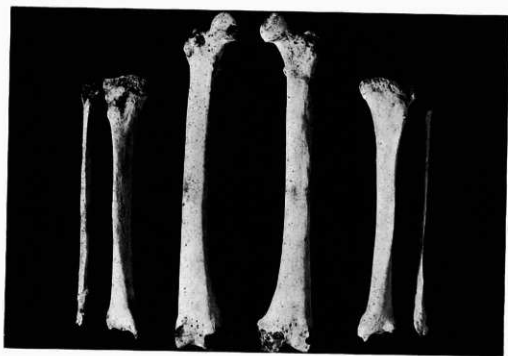


下 肢 骨

3 号 人 骨 (女性, 熟年)

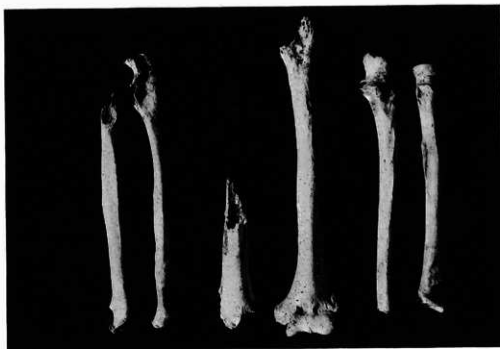


上 肢 骨

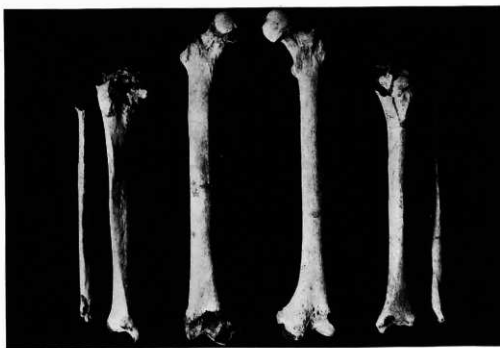


下 肢 骨

7 号 人 骨 (女性, 熟年)



上 肢 骨



下 肢 骨

8 号 人 骨 (女性, 壮年)

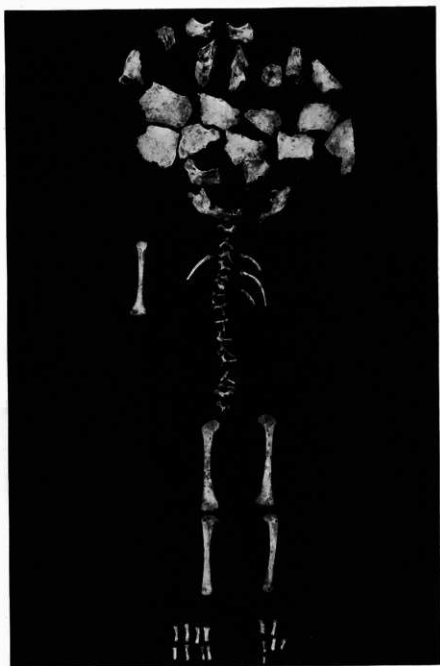


上 肢 骨



下 肢 骨

胎 兒 骨 (月令10ヶ月)



立 石 貝 塚

大分県文化財調査報告 第31輯

昭和49年3月31日

発 行 大分県教育委員会

別府市千代町10-27

印刷所 東洋印刷有限会社

